
Blue;HEAd

ケーシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue ; HEAd

【Nコード】

N2165Y

【作者名】

ケーシン

【あらすじ】

麻帆良学園女子中等部2 - Aに転入することになった青春中毒・諦観系男子中学生の話。

身体は東で経歴は西、心は中立の主人公。
でも色々と巻き込まれる。何が悪いって、転入したクラスが悪かった。仕方がないから今日も諦め、青春探して奔走する。

以下注意事項

大規模な原作ブレイクはしないけど、イベントの半分くらいはオ

リジナル

アンチが読みたい方、主人公無双が読みたい方にはオススメできません

作者の知識は偉大なる先駆者様たちの作品から得ています

二次創作初心者なのであしからず

それでもOKな方はどうぞ。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も（前書き）

「ネギま！」の二次創作を読みたいけど、「テンプレ転生 オリ主最強無双 ハーレム」という展開は飽きてしまったという方にオススメ……になるといいんだけど、結局は作者の力量次第なわけで。

ぶっちゃけ作者は上記の感じな人だから、そういう人にも楽しんでもらえるように作っていくつもりです。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も

三月上旬、放課後の同好会室にて。

僕たち「青春を探そうの会」のメンバーは集まり、同好会唯一の三年生であり、今月をもって中学を卒業するマヒル先輩の送別会を行なうことになった。

つまりは、現在、送別会の真つ最中だったりするわけで。

「俺の門出を祝って、乾杯！」

この場合、主賓が乾杯の音頭をとるのは果たして正しいことなのだろうか。なんて疑問は頭の片隅に放置。

せっかく買ってきた炭酸ジュースを振りに振りまくって部屋中よごしまくっている某M先輩も放置。コンビニで買うのに身分証の提示が求められる場合がある、高価な液体の匂いが混じっている気もするけど放置。

掃除はみんなで行きましょう。

主賓？ 知らないよそんなの。

僕も「乾杯」といって、黒い液体が入っている三百五十ミリリットルの赤い缶に口をつける。黒蜜にあらず。イメージ的には、がぶ飲みすると同じくらい身体に悪そうな飲み物だけど、こっちは骨までしみてボロボロになってしまいそう。

それはともかく、普通「乾杯」って「合唱」みたいになるものじゃないんだろっか。

僕たちの「乾杯」は見事な「斉唱」。

そっちの方が僕たちらしいけどさ。

とりあえず一緒にいるだけで、向いている方角はバラバラ。目指すものは同じはずなのに。正しい道かも確かめないままに独走して。でも、一緒にいる。

たぶん、この空気が心地良いんだと思う。

マヒル先輩もサバサバも、自分勝手に進んで自分勝手に他人を巻き込んで自分勝手に迷惑をかける。けど、決して内側まで踏み込んでこないし、踏み込ませない人たちだから。

こんなことを考えているのは僕だけで、このことをみんなに話せば笑われてしまうだろう。

けどさ。

少しくらい、いいじゃないか。

だってこの場所はもうすぐなくなってしまうのだから。

「エリイに隙あり！」

「えー？」

二方向からの同時攻撃により、エリイこと僕、たんば えり弾場江利は砂糖過多の海へと沈んだのでした。
めでたし、めでたし。

「さらばだエリイ、君のことは忘れないぜ」

妙に恰好つけて去っていく爆弾魔。ジューズ

サバサバはいつもみたいに目隠しでカップ麺を作ろうとして火傷しているみたいだし。

何がいけなかったのかって、まずあなたの思考回路がいけないと思います。「カップ麺＝青春」の等式が成り立つあなたの頭の中がそもそも問題なんです。

「『お前なんとかしろよ』みたいな目で見られても……」

かの有名な麻帆良学園女子中等部1-Aの一員であるサバサバは、はつきりいつて超がつくほどの美少女だ。そんなサバサバに冷たい目で見られると、なんだか僕が悪いような気持ちになってしまう。

けど、僕のせいじゃないよね？

机の上のカップ麺の残骸&お湯はサバサバだし、その他は爆弾魔のせいだし。

このカオスをどう收拾しろと……。

「あー、もう！ メンドくさい！！」

そうして僕は爆弾魔にジョブチェンジした。

脈絡がない？ 知らないよそんなの。

激しい銃撃戦だった。

ノルマンディーさんは結構平気な顔をしていたが、一個小隊に満たない僕たちからすれば、死戦ともいうべき闘争だった。

特筆すべきはマヒル隊長らによる二段構えの戦法だろう。ひとりがプルタブを弾き、敵を圧倒し、目くらましの役割を果たす。もうひとりはその間に缶を振って弾を装填、相棒が弾切れになったところで発射。攻めに転じようとしていた敵の、がらあきになった急所

をねらう。攻撃は最大の防御。大技を放った後の硬直時間を味方がカバーするという、格闘ゲームにも通ずる、古来より伝わる戦法。

長篠くんも真つ青だったはずだ。

他方に目を向ければ、片手でプルタブを開ける技能を隠し持っていたサバサバの立ち回りは圧巻の一言であろう。二刀流ならぬ二缶流は僕らの度肝を抜いた。

目隠しでカップ麺を作る器用さ（成功率30％）は伊達ではない。

孤軍奮闘した僕たちだったが、残弾数の問題で戦略的撤退をせねばならなかった。

「やりきったぜ」

マヒル先輩は甘い海に沈み、満足そうだった。

「……………」

サバサバは戦いの爪跡を、いつそ冷徹さを含んだ瞳に映していた。いつだって悲しみや虚しさは僕らの心に付き纏うものだ。それが闘争者の宿命。

彼女の古くからの戦友であった携帯用小型ガスコンロくんは重症を負い、電気ポットくんは戦死……………。

前々から不調を訴えてはいたのだ。

僕もサバサバも、そんな状態にあった彼を無理に戦地に送り込む

ような真似はしたくなかった。

けれど戦況はそれを許さなかった。

目前に迫った前線。守るべき者たちの存在。電気機器としての矜持。そして、自分こそがサバサバの相棒なんだというプライド。

……ベッドに横たわっていることは、できなかつたのだろう。

戦友を失つたのはサバサバだけではない。

「諭吉……英世……」

僕の諭吉が溺死した。レシートに抱かれた彼はいつもと変わらぬ表情をしていて、それが余計にくやしくて。

英世は三人も昇天された。無駄死にだった。割り勘の弾代と戦闘服の整備代クリーニングだった。

「青春つて、なんだろーな」

「アヒルくせに偉そー、たそがれている暇があるならさっさと片付けろあほ」

今日も今日とてサバサバの毒舌(?)は絶好調。ポットを壊されて機嫌が悪いのだろう。ちなみに「アヒル」というのはマヒル先輩のあだ名みたいなもの。マヒル先輩はアヒルが好きらしく、アヒルのストラップをじゃらじゃらさせていたりする。右耳に光るアヒルピアスは、ちょっとどうかと思う。

さつきマヒル先輩にポットを弁償してもらおうと、サバサバが力ツアゲを試みていたけど、がま口ならぬアヒル口の小銭入れを渡されていた。

「いやー、昨日英世に愛想つかされちゃって」「……悪趣味」という噛み合わない会話があたりなかつたり。

サバサバは二重の意味で嫌な顔をしていた。

ちなみに、僕の英世さんがまたひとり一時的に拉致されて財布から去ってしてしまったのは言うまでもないことである。割り勘の話はどこへ行ったのだろう。事後報告はいけないと思います。

床をぐしぐし、窓をふきふき。

時折マヒル先輩がぶつぶつ不満を垂れて、サバサバが律儀につっこむ。嫌な顔してばかり、嫌な顔大会開いちゃってるメンツで大掃除。

そんな平和な夕刻。

これが青春なのかはよく分からないけれど、なんとなく大切だっと思う。

時間を無駄にして、金を無駄にして。

自分が立っている場所の価値すら知らなくて。でも。

遠い未来から現在を振り返ったときに、あのとき自分は「生きていたんだって、そんな風に思えるような今なんじゃないかなって思う。僕にとつての青春はそんな感じだから、僕はこの部屋の扉を叩いたんだと思う。」

「アヒル、窓はちゃんと棧さんまで拭く」

「細けえな。年末の大掃除じゃないんだから」

文句をいいながらも棧を丁寧に拭くマヒル先輩。この人なんだかんだ言つてサバサバを可愛がってるから強く出れないんだよね。で

もそれ以上に、ドがつくほどのシスコンで、救えないらしいけど。

「年度末のおーそーじ」

「……うまくないよ、サバサバ」

ちょっとだけ得意顔をしていたサバサバに突っ込まざるをえなかった。本人は僕の意見をガン無視する方針のよう。ちょっと悲しい。

「しかし、サバサバがここまで掃除にこだわるとは、ちょっと意外だったな」

ちょうど窓を一通り拭き終えたところでマヒル先輩が言った。

確かに、僕もその意見には同意。

「こだわりはないけど、出て行くときは綺麗がいいから。もう一ヶ月もないし」

「は？」

マヒル先輩は困惑した顔を見せ、

「俺はともかく、お前らはまだまだここ使っただろ？ 出て行くって、なんだよそれ」

「うっん、私は同好会をやめないよ」

生まれそうになった認識の齟齬にサバサバは即座に対応した。けれど、一瞬だけ僕のほうに視線を向けた彼女は、そこから先を言いよどんでしまう。

そこで僕は彼女の意図に気づいた。

やめたいわけじゃない……。

僕だって同じ。でも無理なんだ。

だからガラにもなくためらうサバサバに代わって、

「この同好会は今月をもって解散します」

それはマヒル先輩抜きで話し合っただけの結論だった。

規則の緩い麻帆良では、所属する生徒が同じ学校の生徒のみの場合、同好会の設立に必要な最低人数は二名だ。しかしさすがに学校を越えて設立する場合の最低人数が二名というわけにはいかないらしく、三名となっている。むしろ、基本的には最低三名以上必要なのところを、同校の生徒のみならオマケで二名にしてくれているというのが正確な同好会法成立の経緯だろう。

当たり前のことであるが、女子校に通うサバサバと男子校に通う僕とでは学校が違う。

マヒル先輩が卒業していなくなれば、三名の定員を割ってしまう。その場合、新しく同好会に入ってくれる人員を獲得しなければ、同好会は解散、この部屋は僕たちの手を離れる。

この場所は僕たちだけの聖域だった。

僕たち以外の人間に踏み込ませる気は、ない。

「知ってますか先輩。三名って三人分の名前が必要って意味なんですよ」

「だからそれがなんだって」

「同好会の最低定員は三名です」

僕たちだけの聖域の、僕たちだけの青春。

大人にも子どもにも見えない、僕たちだけの、ひとりよがりなりアルだから。

いつだって現実っていう壁は無表情に僕らを阻む。その壁に沿ってレールが走っていて、僕にはその上を進むことしかできない。

冷酷とか残酷とか言えるほど悲劇じゃない。この出来事を嘆けないくらいには、僕は悲劇つてやつが大嫌いだった。

ちょっとだけしんみりする。

でもすぐにそんなシリアスな空気はマヒル先輩が吹き飛ばしてくれる。

だってこの人は爆弾魔だから。

「そっか、そうだよな。最低三名だったな」

「はい」

「学校を越えて設立する場合、三名だったよな」

わざわざ言い直したマヒル先輩に嫌な予感。

爆破された壁の破片は、僕にふりかかることもしばしば。

「確か、もうひとつ、定員に関する条項があったような気がする」

わざとらしく結論を先延ばしにしてニヤニヤと僕を見下ろすマヒル先輩。彼の言いたいことを予想できてしまった自分が嫌になる。
できるのか？

……できるんだろーな、この人なら。

「アヒル先輩にしてはナイスアイデア」

「だろ？」

「今日一日は先輩つて呼んであげる」

不機嫌だったはずのサバサバの笑顔を視界の端に捉えて、もう僕は白旗を上げるしかなかった。

001・青春を探そうの会、会員たちは今日も（後書き）

いかがでしたでしょうか。

……とか偉そうに言えるほど文字数書いていないわけですが、主人公が2・Aに転入するきっかけはこんな感じ、ということ、第一話でした。

感想は気軽にお願いします。

感想を書く……。

作者が喜びます。二次創作にかまけて学業をおろそかにします。学力が下がります。日本人の平均学力が10のマイナス8乗くらい下がります。大多数の人の学力が相対的にアップ!? つまり受験生にオススメ。四捨五入は恐ろしい兵器です。

冗談はさておき、作者の脳内は な感じなんで、ときどきエリイくんも迷走すると思います。

それでもOKな方は今後もよろしくお願いします。

002：ハーレムイベント（笑）

春休み。

小説にすれば上下巻、映画なら二時間のアニメ映画にできるほどの「アヒルvs麻帆良大妖怪」の戦いがあつたとかなかったとか（サバサバ談）。

一年ぶりの里帰りをしていた僕の知らない間に事態はかなり進んでいたらしく、始業式の前々日に麻帆良に帰ってきたときにはもう取り返しのつかないことになっていた。

具体的には、男子寮から僕の居場所が消滅していたのが、まず一点。部屋にあつたはずの私物は綺麗さっぱり消えているし、そこそこいい関係を築いていたはずのルームメイトには「なんでお前がいるの？」みたいな目を向けられるし、その他大多数の男子生徒からは親の敵みたいに見られた。

いや、知らないわけじゃなかった。

知っていたさ。

だつて九月くらいに募集要項配られたもん。すぐ資源ごみに出したけど。

「男女共学化のためのテストケース」

……だつたと思う。

詳しい内容は省くけど、麻帆良学園女子中等部二学年の各クラスにひとりずつ男子を放り込んで観察をするという企画だ。なんでも五、六年に一回くらいのペースで行なわれる名物イベントらしい。毎回なにかしらの問題が起こって共学化が白紙に戻ってしまうのに、こりもせず行なわれるから「ハーレムイベント（笑）」などと不本意な名称で呼ばれることもしばしば。ちなみに2-Aの担任である

ダンディおじさん高畑先生も、テストケースの被験者なんだとか。で、僕の学年でちょうどそのテストが行なわれるらしくて。見事、「当選」したらしい。

僕は申し込みをしていないはずんだけどな……。

十中八九マヒル先輩の仕業だろうけど。

だって僕の行くことになった2-Aには、もうひとり男子生徒が入ることになっている。つまり、僕とそいつで計二名。各クラス一名つて要項に書いてあるはずなのに。

サバサバは、「アヒルと麻帆良大妖怪がバトルした」って言うってたけど、妖怪つて学園長のことだよな。学園長に直訴できて、さらには申し込みすらしていない僕をテストケースにねじ込んでしまうマヒル先輩つて、一体何者なんだ。

居場所のなくなった男子寮にいる間は、「なんで弾場が……」とか「俺のハーレム計画……」とか、そんな低くて小さな声がいたるところから聞こえてきて、正直怖かった。

うん。僕が「マヒル先輩爆発しろ」と思ったのは言うまでもない。むしろ屋上で叫んだ。そしたら「リア充爆発しろ」との合唱が返ってきた。残された寮生たちの心の叫びだった。無駄にそろっていた。いつ練習したんだあいつら。

と、いつか。マヒル先輩。

なんでよりによって美少女ばかりの2-Aに行くことになっているんですか。しかもなんでそのこと寮のみんなにバラすんですか。

サバサバと同じクラスだし、知り合いもいるから、他のクラスに突っ込まれるよりは馴染めるかもしれないですけど。それでも2-Aはないです。恨まれ方がハンパないです。テストケースに「当選」した、僕と同じ境遇の人たちからすら恨まれるってなんでですか。

恨みますよ。

……陰陽師ではない僕の怨念が通じたのかは定かではないが、マヒル先輩は籍が男子高等部に移ったその日に退学届けを出して、一日も登校することなく高校中退の最終学歴を得たらしい。

現在はリアル自宅警備員。

警備の場合は週一で深夜のコンビニに移るとのことだが、志望動機が「某少年誌のフラゲのため」って、よく面接通ったな、おい。というかコンビニってフラゲできるのだろうか。マヒル先輩本人に聞いても「知らん。フィーリングだ」とか意味不明な返答をいただけただけであった。大丈夫なのか、あの人。本屋でバイトしろと思わなくもない。

ちなみに。

この時期を境に、深夜のコンビニでバイトをしている大学生が「可愛いんだけど、カップ麺にお湯を注ぎすぎてポットコーナーのまわりを水びたしにする中学生くらいの子がいる。片付けるこちらの身にもなつてほしい」という愚痴をこぼすことがなくなったという話があったりする。

そんなこんなで始業式。

幸運にもテストケースの被験者に選ばれた男子生徒二十余名プラス僕は、二千人を越える女子生徒の集団が整列する、その脇の小スペースに肩身の狭い思いをしながら（そう思っていたのは僕だけだったのかもしれない）、並んでいた。

新入生のうち、中等部からの転入組が某ぬらりひよん先生の後頭部の長さにざわつくなんて恒例行事もこなしながら、無事に閉式となった。

その後、各々のクラスに移動していく女子生徒の大群のかたわら、二年の学年主任である新田先生に引率され、特別教室棟にある教室に移動した。そこで諸注意が書かれた冊子を受け取り、一時間ほどその冊子を片手に注意事項に関する話を聞いて、いよいよ教室に向かうことになった。

……のだが。

ほぼすべての男子生徒が、教室内でホームルームを行っていた担任教師に任せられていくのに対して、なぜかA組の前だけは素通り。

そのまま新田先生に連れられて、廊下を歩いていく。

確か、この先には応接室や学園長室があったはず。

残ったのは僕と男子生徒（かなりのイケメン）がひとり。A組以外に転入することになった生徒はみんな、もうクラスの輪の中だ。

隣の男子生徒は涼しい顔をしているが、彼はこうなることを知っていたのだろうか。正規の手続きを踏んでいない僕は、彼とは対照的に内心ハラハラしまくっていた。学園長室で学園長直々に糾弾とか、僕のチキンハートには洒落にならない。

マヒル先輩だけじゃなくて、学園長にも呪いの電波を送っておくべきだったのだろうか。でも、相手はぬらりひよんだから効果は薄いかもしれない。実際に効果があったら、それはそれでやばい。戦争の火種というかなりヘヴィな副産物ができるから。

大前提として僕は陰陽師じゃないというオチ。

精神安定剤の錬成にかなりたくさんの対価を支払った気がする。温度とか。

で、いつの間にか学園長室の前にいるわけで。

「学園長、今日付で二年A組に転入する、神海レイジと弾場江利の両名をお連れしました」

新田先生が扉に向かってそう言うと、「ご苦労じゃった」との学園長の返答。

イケメンは「コーミ」というのか。

珍しい名字、初めて聞いた。

新田先生はイケメンと僕に一声ずつ励ましの言葉をかけてから職員室に帰っていった。

厳しい人という印象しかなかったけど、意外と生徒想いの教師なのかもしれない。

イケメンは僕を一瞥して鼻を鳴らした後、物怖じせず学園長室に入った。イケメンの態度にむかついた僕は、イケメンが開けた扉をあえて一度閉めてから蹴破って学園長室に入ったりはせず、肅々とイケメンの後に続いた。

そんな冷めた目で見るとよ。

「ふおおおお、よく来たのう二人とも」

好々爺のように笑う学園長。その笑顔の裏で、一瞬にしてこの部屋に結界を張るあたり、油断ならない人物である。

学園長の斜め後ろに控えた高畑先生は、微笑してイケメンに小さく手を振っていた。おい。それは公私混同じゃないのか？

イケメンも関係者なのかよ。

……まあいいや。

しかし、なんだそっちか、と安心する。

どうやら僕は糾弾されるために呼ばれたわけではないらしい。

「楽にしてくれて構わんぞい」

僕は休めの姿勢。

イケメンはなぜか髪をかきあげた。……なんでよ？ 様になって
いるのが憎らしい。高畑先生も苦笑するくらいなら突っ込めばいい
のに。

「気づいておるとは思うが、ワシが呼んだのは魔法生徒としての君
らじゃ」

ふざけてんのかこのぬらりひよんは。

「ふお!？」

ぬらりひよんが驚く。

あ、やば。そういえばマヒル先輩に言われてたっけ。ぬらりひよ
んは読心術が得意なぬらりひよんだから気をつけろって。ぬらりひ
よん侮りあなじがたし。

「……………」

「どうかしましたか、学園長」

「いや、なんでもないぞい。ところで弾場くん、協会からの連絡は
届いておらぬか？」

「僕の方には何も」

「そうじゃったか……。うむ。時間もないし、まずは紹介からはじ
めようかのう。こちらがA組の担任の、高畑・T・タカミチ先生じ
や。NGO団体『悠久の風』にも所属されておる」

「渋さが五十パーセントアップ（当社比）してるな、最後に会った
時より。」

「はじめまして、江利くん。レイジくんは久しぶり」
「お久しぶりです、タカミチさん」

イケメンの豹変振りに驚く。なんだこいつ、いきなり無垢な少年っぽいキャラになったぞ。さっきの髪かきあげキャラはどこに行ったんだ。

でも突っ込まない。そんな空気じゃない。

そんな琐事よりも僕はどうするべきなんだろう。一応、高畑先生と僕は初対面なんだよね。でも「はじめまして」って言うのはベミヨーだし。

とりあえず会釈。

「……ども」

なんかすごく無愛想になってしまった気がする。

「そして、同じく『悠久の風』所属の、神海レイジくん」

学園長の説明に納得。つまりイケメンは高畑先生の後輩なわけね。……そのイケメンは髪をかきあげるな。

「よろしくしてあげようじゃないか。弾場くんだったけ」

「弾場江利、関西呪術協会所属だ。よろしく」

差し出された右手を取る。

こんなところで握力勝負をする気はないのですぐに離れたが。ちよつとそこ、残念そうな顔をしない。僕は非力なの。てか、ウザイケメンなのか熱血少年なのか、キャラぶれてんじゃないよ。

「紹介も終わったところで、弾場くん」

「はい」

「君には今日付で魔法生徒として活動をしてもらうことになった。引越しのごたごたで連絡が遅れてしまっているようじゃが、これは協会も了承済みのことじゃ」

「はあ……」

「ワシらとしても、一般生徒として入学したとはいえ、西に所属する者をただ放置するわけにもいかなくてのう」

……そういうことか。

僕もそう長くは「普通の」学生生活を送れるなんて思っただけで、一年が限度だったか。嘆いても仕方ない。遅かれ早かれこうなることは、分かっていたことだし。

「警備に入ってもらうのは来週からじゃ。それまでには確認をしておくのじゃぞ」

「はい」

「……それで、ここからが本題なのじゃが」

学園長は一拍置き、

「神海くんと弾場くんにはペアで活動してもらうことになった」

この流れなら普通そう来るわな。

そこのイケメンが「な!？」とか効果音付きで驚いている理由が分からない。

「学園長!？ 俺にこのエセ外国人と組めとおっしゃるのですか」

うわー。その本音は聞きたくなかった。

エセ外国人って何さ。僕はれっきとしたハーフだ。髪を黒に染めて、目にも黒のカラーコンタクト入れてるから、エセっぽく見えるかもしれないけど。

それにエセ外国人だからチーム組めないって理解が追いつかないんだけど。西の人間にはそういう奴もいるけども。イケメンは東… というか世界のフィールドで活動するNGO所属のはずだろ。

それと、本当にどうでもいいことだけど、一人称俺なのね。イケメンだし、私とか僕とかだと思った。それが我輩か。

あ、想像したら笑えてきた。

イケメンが髪かきあげながら「我輩は……」って。

「ぶ」

いや、今の僕じゃないからね。
うつつむいてる学園長だから。

「き、決まったことは、決まったことじゃ。決定は覆らん」
「しかし……!!」
「ぎ、逆に、聞くんが、神海くんは何が不満なんじゃ？」

あー、耐えてる耐えてる。

「俺は、」

（我輩は、）

「ぶ」

僕の脳内補完でまたしても吹き出しそうになる学園長。
読心術やめればいいのに。

「学園長？」

「な、なんでもないぞい。続けてくれい」

「……俺は、西に所属している弾場を、背中を預けるほど信用することはできません」

不信感を表しながら続けるイケメン、……コーミ。誰に対する不信感かは言うまでもないだろう。

コーミの言葉を補うなら「西に所属しているくせに、外国人の血が入っている弾場は」となるだろう。極論を言ってしまうえば、西洋魔術師を目的敵にしている関西呪術協会にとって、外人というのはすなわち排除すべき敵。それだけに、外からは僕が存在がすごくチグハグに見えるらしい。

「そうは言ってももう、弾場さんと組む適任者が神海くんくらいしかいないのじゃよ。神海くんは正式には東の所属ではないし、使う術も西洋魔術ではないと聞く。弾場くんが敵対する理由はないのじやよ」

「確かにそうかもしれませんが……」

「分かってはくれぬか？」

結局、その問いにコーミが頷くことはなかった。

高畑先生は出張から帰ってきたばかりで、学園長への報告などがあるらしく、コーミと僕は一足先に学園長室を辞して廊下で待つことになった。

気まずいと思っているのはどうやら僕だけのようで。

コーミは裏の関係の話が終わった途端、イケメンに変わった。精神がイケメン（笑）なのだ。二重人格を疑うくらいに。

「弾場くんも運が悪い。この俺と同じクラスになったのが運の尽きだったな」

高笑いを始めるイケメン。

「わーはっは、て。何その笑い方。」

そんなに髪かきあげていたら、前髪にだけダメージがちょっとずつ溜まっていつって中年になったときに生え際の後退スピードが上がると……なんて事実があるかどうかは別にして、とりあえずそっちの方が面白そうなので、そうなることを願った。

ただし僕は陰陽師以下略。

「キミもせいぜい頑張りたまえ」

せんせー。イケメンの言ってることが分かりませーん。僕は一体何を頑張ればいいのですかー！

ハーレム計画？ ああ、納得。

いや、僕は作らないよ。というか作れないし。

問題を起こさなきゃいいけど、彼。むしろイケメンはイケメンだから、問題を起こすところまでたどり着けなかったりするのだろうか。

「まあ、誰一人渡さないが」

現実を見ようよ。

「A組は俺のものだ」

イケメンが一匹、バカが一匹、アホが一匹、変質者が一匹。

おまわりさんこつちです。とりあえず、のべ四匹捕まえてください。

おまわりさんの代わりに高畑先生がやってきて、イケメンが半分くらい後輩モードになった。イケメンは後輩なのでトコトコ歩く。高畑先生は親鳥だ。それはともかくイケメンはイケメンなのでこんなことをしてはいけないと思います。現行犯逮捕できないのは社会の損失です。

……うん、バカは僕のほうだった。

ただし僕は以下略。おまわりさんがやってこないのも、うなづける。

意味不明？ 僕もどこに行きたいのか自分でも分からない。

「この階段を使うと職員室があるから。困ったことがあったらいつでも相談に来てね」

丁寧な説明恐れ入ります、高畑先生。

でもあなた出張ばかりで滅多にいないはずでしょ、なんて野暮なことは言わない。社交辞令のようなものなんだろうし。

僕は高畑先生に連れられて、行きたいかどうかはともかく、3・Aの教室に向かっているわけだ。

廊下が長い。一学年二十クラス以上あるから仕方ない、諦めが肝心。そこから三分ほど歩いてやっと到着。そりゃ、職員室からそんなに距離があるわけないか。

ちよつとだけ開いたドアから聞こえてくる、わいわいきゃっきやと騒がしい声。

わー。すごくワクワクしない。

苦笑しながらドアを開けようと手を伸ばした高畑先生。

しかし直前でイケメンがそれを制止する。

「ここは、俺が」

その恰好つけは必要ないと思う。

紳士っぽく言ってるけどやってること全然違うから。

というか気づけ。上を見る。……やっぱ見るな。直進しろ。

ただし以下略。なんかもう色々とアレだ、原型がない。それでも願いは聞き届けられ、イケメンは待ち構えるトラップにチャレンジしていった！

結果、全弾命中。

加害者さんたち歓声上げてるけど、それあなたたちのターゲット違うから。転入生だから。

高畑先生と僕は廊下でその様子を見ていた。

苦笑しているくらいならフォロワーしてあげたらどうですか。もしかしてこれが「悠久の風」の教育方針なんですか。

確かに、あれがかわせないのはちよつと問題だけ。

でも、落下してきた金ダライを頭で受け止めて、そのままバランスを保ってるのはすごいと思う。けど、それ必要なの？ 僕には真似できない。シユールすぎる。てかなんで髪かきあげる動作したのに金ダライが落ちないの。神秘だわ。

二人、廊下に立ち止まって教室に入りあぐねていると、イケメン（+水+チヨークの粉+頬と額におもちやの矢）が教卓を叩いた。かなり大きな音がして教室が静まる。だけど金ダライは落ちない。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ、それでも生きるとは劇的だ！」

有言実行で劇的なイケメン。

それでも金ダライを落とさないイケメン。

やりきった……って顔をしているイケメン。

生きるとは劇的だよ。分かるよ。でもそれこのメンツ前にして言うことじゃない。現在進行形であんたの生を劇的にしてるのはA組の生徒だから。

あと、その顔は弾幕をかわせるようになってからしてほしかった。高畑先生と僕の心がひとつになった瞬間、だったはず。

髪をかきあげようとして、ちょっと恰好つけすぎて金ダライに手が当たり、結局落としてしまっイケメン。なんか煮え切らない。せつなくならそのままでいろよ。

金ダライが床に転がって、がらん、と特有の音を立て。

A組の時間が流れ出す。

途端に騒がしくなる教室内。

やっとな室内に入っていく高畑先生。

僕もそれに続くべきなのか迷ったけど、迷ってる間にタイミングを逃して廊下に取り残されてしまった。帰ろうかな。

「はいはい、みんな静かにー」

高畑先生の一声で、だんだんとボリュームが下がっていく。しかし完全に静かになるまで一分近くもかかった。さすがはA組。

「話は聞いていると思うけど、A組には二人の転入生が来ることになりました」

「いえーい、どんどん、ぱふぱふー」。

最初のはともかく後の二つはどこで鳴ったんだ？

「一人目が、こちらの彼、神海レイジくん」

イケメンはそれをやめなさい。内容はもう面倒だから言わない。というか仮にも高畑先生はあんたの先輩だろ。なんで黒板に自分の名前書かせてるんだよ。自分で書けよ。

高畑先生が「『ごうみ』ってどういう字だっけ」とチョークを持ったまま思案する。でも結局思いつかなかったようで、ふりかえって尋ねようとした、ちょうどその時、

「お前！」

とイケメンが声を上げた。険しい顔をして、右手で誰かを指し示している。

廊下からではよく見えない。

そっと教室内をのぞいて見ると、

「……サバサバ？」

最後列、金髪幼女の隣に座っているサバサバを振り返っている生徒が多数。我関せずの態度を貫く生徒も数名。ちなみにサバサバもそのひとりで、眠たげな目をしている。

……サバサバ、キミが事件の中心人物っぽいよ。

あ、サバサバの目がぱっちりした。

僕に気づいた様子。先にイケメンに気づくべきだろう。教卓を指さす。じじじ、と、半開きの目だけが動く。再びぱっちり。やっとイケメンの存在に気づいたみたい。

「お、お前！」

どうやらテイク2をやってくれるらしい。唐突に始まったテイク2だったが、ほとんどの生徒が即座に対応。みんなの温かさに感謝だよ本当に。

こてん、とサバサバが首を傾げる。
状況が理解できないらしい。

「……転生者、か？」

さっきまでとは打って変わって、ゆっくりと息をはきだすような、慎重的なイケメンの声。

周りの誰一人、イケメンについていけなかった。「てんせいしゃ」って何のこと？ な空気が流れる。
でも誰一人、口を挟まなかった。

二人の間には周りには分からない何かがあるのだと信じて。

「あ、あなたは！」

ついにサバサバの返答。

空気が引き締まる。緊張の一瞬。期待が膨らむ。

「……ぶ、ぶ、仏教の勧誘はおこ、おこお断りです」

沈黙。

なんかもう、僕は出ていかざるをえなかった。

「サバサバ、もういい。もう頑張らなくていいだ。楽になってもいいんだよ」

サバサバは半開きだった目を、ついに完全に閉じた。

彼女が何を得て何を失ったのか、それはきつと彼女にしか分からない。

それから一時間は怒涛の質問タイムだった。

転入生であるはずの僕が、サバサバのことをいきなりサバサバとあだ名で呼んでしまったのがいけなかったらしい。僕とサバサバの関係について根掘り葉掘り聞かれた。ツインアホ毛センサーを持った生き物が「ラブ臭」とうるさかったけど、僕とサバサバはそんな関係じゃない。でも、こういうものはどれだけ本人が否定しても無駄なもので、翌日には某パパラッチが号外を発行したとかしなかったとか。

イケメンもイケメンだけあって色々と質問を受けているみたいだったけど、どこか調子悪そうだった。

元気出そうぜ。

最後まで、誰一人として彼の「転生者」発言に触れなかったのは優しさゆえか、自分たちには荷が重いと判断してのことか。

なにはともあれ。

そんな感じで登校一日目は幕を閉じる。

はずだったのだが……。

002・ハーレムイベント（笑）（後書き）

イケメンのあの台詞は「めだかボックス」より。
イケメンくんにはテンプレでいてほしいという作者の願いが込められていきます。

003・苗くんと仲間な愉快たち

「神海くんも弾場くんも転入のことで色々あつて疲れているだろうから、今日のところはそのくらいにしておきなさい」という旨の高畑先生のお言葉があり、質問攻めから解放されて、はや一時間。ちよつど昼食時である。

で、僕はその昼食時を早速クラスメイトの女の子と過ごしているわけだ。

僕の手が早いわけではない。

古くからの知り合いだったついでだけで。いわゆる幼なじみ。

「えーくん、どないしたん？ そんな仏さまみたいな顔して」

「……ちゃんと頂いただつてつけようよ。そうじゃないと僕は、二回までしか許さない人になつちやうよ」

「それは困るな」

からからと笑う僕の幼なじみさん。具体的にはぬらりひよんの孫でも人間。和服が似合う京美人。でもミニス力制服。知らない間にとびきりの美少女になっていたんですけど、近衛木乃香さん。

えーくんこと僕は教室から出て行こうとしたところで、捕獲されてしまったわけです。木乃香の背後には鬼が見えた。デフォルメされて二頭身だった。頬を膨らませても微笑ましいだけです。見慣れていますから。

そしてちよつど昼食の時間だったために喫茶店へゴー。

触覚のようなアホ毛センサーを頭部に持つ早乙女、略してアホ女（もしくはアホセンサー）が「ラブ臭」と反応したせいで黄色い歓声上がるし。

イケメンには睨まれるし。「よくも俺の木乃香を……」って、木

乃香はお前のものじゃないから。というかもう呼び捨てなのね。転入初日で初対面のクラスメイトの名前覚えてるのはすごいと思うけど。

そしてパパラッチ朝倉のニヤニヤ笑いには寒気しか感じなかった。「二股」「修羅場」という不穏な単語は僕の聞き間違いであることを祈りたい。転入早々二股男のレッテル貼られるのはキツ過ぎる。ただでさえ女子ばかりなんだから、そんなことになったら学校が地獄だ。僕は女の子と付き合ったことすらないのに。

未来のことを憂えていても仕方ない。
それより現在のことだ。

木乃香は眩しすぎるくらいの笑顔を僕に向けている。さっきからずっと世間話ばかりをしているのだが、そんな話をするためにわざわざ僕をここに連れてきたわけじゃないってことくらい恋愛経験皆無な僕でも分かる。

言わなければならぬことも、予想はついている。

でも、なんなんだろう、この状況。
そこかしこから視線を感じるんですけど……。
見覚えのある後頭部とか、聞き覚えのある声とか。あと見覚えのある前髪かきあげとか。いや、周囲に溶け込もうとしているのは分かるけれど、客の半分以上が同じようなことやってるド素人じゃ、さすがに気づくでしょ。あとイケメンは帰れよ。お前隠れる気ないだろ。

「えーくんえーくん。はい、あーん」

気づいていないのが、約一名いるけども。

木乃香さん自重してください。そんな期待した目を向けなくて

ださい。

後ろで、きゃー、とか言う声が聞こえたんだけど。イケメンの同類ですか。顔がいい人たちは中身が残念じゃなきゃいけないっていうルールでもあるんですか。

あー、帰りたい。

何が一番僕を帰りたくさせるのかっていうと、ダントツで、カウンターに座っている知り合いの自宅警備員だろう。コーヒー飲みながら新聞読んでいたはずなのに、気づいたらこっちに向かってサムズアップしてるし。自宅警備はどうしたんですか。偉い人に怒られても僕かばえませんからね。

どうすんのこれ。衆人環境で「あーん」ですか。このフォークに巻き取られたナポリタンを食せと？

僕を悶殺させる気ですか。

ええい、もうどうにでもなれ！

アホウドリが鳴いている。

あほー、あほー、て。

おーいアホセンサー、仲間が呼んでるぞー。

……

……
燃え尽きたぜ……。

現在、僕と木乃香は公園のベンチとなりあって座っている。時刻は夕方。

木乃香からの「あーん」攻撃が終わったと思ったら、今度は「あーん」おねだり攻撃だった。僕は死んだ。遺体は市中を引きづり回された拳句、こうやってベンチさらしの刑に処せられている。

それに加えて、諭吉がまた一人僕の元から去っていった。この厳しい現代をとみに生き抜いてきた戦友の彼だったが、きつと僕にあきたのだと思う。でも彼は無口だから何も言わなかった。僕と彼は友達だったけど、ついぞ話すことはなかった。

一体、今日だけで何人の男たちから爆死しろと願われたのだろうか。諭吉もそう願ったのだろうか。

僕はもう死んでいるというのに。
向ける場所のない彼らの不満が、僕一人の処刑で収まるはずがないのだ。むしろ今日のことですら燃え上がっただろう。そして魔法使^{マジックユーザー}たちが麻帆良を変えるのだ。中世のレジスタンスのように。
ははは。

僕は歴史の礎となった。

「なあえーくん」

「なんか僕が苗くんになつたみたい」

「そーやねー」

「……ごめんなさい」

謝るときはきちんと謝る。

それが男ってモノだろう。

「ごめんなさい無駄に恰好つけて。

「……えーくん。ほらあれ、一番星や」

「うん」

「……なんや寒なつてきたなあ、えーくんは大丈夫？」

「うん」

「……」

「……」

なかなか本題に入れないのは、木乃香も僕も同じだ。

言わなければならぬことは決まっているはずなのに、最初の一言が口に出せない。

言つてことは、認めるってことで。

それはこんなにも難しい。

「えーくんは」

「ん？」

「ウチのこと嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

「好き？」

「嫌いじゃないよ」

「……えーくんのあほ」

ごめん、木乃香。

でもその言葉は僕が言うわけにはいかないんだ。友達としての感情だったとしても、認めてしまえば線引きが狂ってしまふ。優先順位をしつかり決めておかないと、最後にはすべて失ってしまうから。

それに、伝えればそれは事実になって期待が生まれる。

木乃香が立っているところは危うい場所だから、いつだって味方になってあげられるわけじゃない。裏切られるのは、初めから信頼がないことよりもずっとつらいんだよ。

「ごめんね木乃香」

「どしたん？」

「……ごめんね」

木乃香から逃げて。

「なあえーくん」

苗くんなんて言わない。

木乃香がそれを望まないから。

「なんでお星様は光ってるんか知ってる？」

「そんなの」

燃えているから。

直線的な答えを返しそうになって、やめた。

そんな答えは全然恰好よくない。青春じゃない。

僕が答えあぐねて一分ほどして。

勢いをつけて木乃香がベンチから立ち上がる。スカートひらり、半周回って腕は後ろで組む。僕を覗き込む、にいつとした顔。頬上げて。初めて僕に見せてくれる一面。京美人っぽくない、どこにもいるような、ここにしかない笑顔の美少女。中学生らしい等身大の姿で、僕の前に立つ。

「時間切れや。えーくんは答えられなかったので宿題です。提出期限は分かるまでにしたるから、ちゃんと調べてウチに報告すること」

「……了解です。お姫様」

「じゃ、ウチはもう行くわ」

とてとて去っていくお姫様。

その足が、公園の出口の車止めがあるところで、とまる。

「ウチの名前の呼び方に注意やえー、二股えーくん」

「……………」

ポリウムに注意やえー、エセ天然このちゃん。

気づかない振りしてただけだったのか、尾行クラスメイトに。

僕が二股男扱いされるって分かっていてこんだけ振り回すって、鬼ですか。可愛いですよもう。

「はあ」

宿題どうしよ。

女の子は時々、男の僕には理解不能になるのだ。

「なあ、あんたはどう思う」

「……………」

「答えなんて期待してなかったけどさ」

「……………」

「寂しいぜ」

僕たちの背後にずっと立っていた彼に尋ねても、やはりというか、答えは得られない。

顔色が青を通り越して黒くなりかかっているから仕方ないのかも
しれない。

「最近調子はどうよ」

「……………」

「そっか。それは奇遇だね。僕もこの前炭酸のシャワーを浴びたばかりなんだ」

「……………」

「頭皮は心配ないよ。あんたらと違ってリアルタイムで補修されて
くから」

……………

……………

「ねえママ。あのお兄ちゃん銅像さんとお話してるよ」
「見ちゃいけません」

さて、女子寮である。

そびえ立つ威容を見上げて首を痛くしたりはしない。今日はすでに三日目である。

三日目であるからこそ片付けねばならぬ問題もあるわけであり、今日は早めに潜入する心積もりだった。

この件について木乃香嬢を恨む気持ちは一切ないことをここに記しておく。

Q、こいつでどこだよ。

A、女子寮の前です。

……まあいい。

現在地の地面に注意書きをしている暇はない。

今はとにかく女子寮への潜入が最優先任務である。

「アーヒールー、不審者発見したよー。たすけてー」

「ちょ、サバサバ!？」

任務失敗。

サバサバによって女子寮の管理人室に突き出された僕は、管理人さんの前で正座をしている。

「で、キミには本当にやましい気持ちはなかったのかね」

「はい」

「ではなぜ、庭の植木に隠れて寮の中を窺っていたのかね」

「それは……」

「答えられないのかね」

「……僕には、青春の探求者としてのプライドがあるんです」

そう。僕は「青春を探そうの会」のメンバーなのだ。

女子寮を見たら忍び込まずにはいられない……ってわけじゃないんだけど。

マヒル先輩がアヒルに固執するように。サバサバがカップ麺に固執するように。二人には及ばないけれど、僕だって青春を求めている。

「さいばんちよー、被告人にいしやりよーを要求します」

「発言を許そう」

サバサバ、刑事裁判と民事裁判が混ざっちゃってるよ。

「おらー、このエロ餓鬼がー、新しいポット買ってくれないと泣くぞー」

それはちょっと買わざるをえないね。

「……と、いうことらしいが？」

「すみません裁判長。僕にはもう諭吉がいないんです。裁判長が僕につけている野口さんがたぶん十人くらいいると思うので、それでお支払いをお願いします」

「……………」

「飽きた。帰る」

サバサバが管理人室を去っていく。

残される僕と管理人さん。

「裁判長、自分の部屋を覗き込むのは罪になるのでしょうか」

「ならんだらうな」

「ですよー」

このネタは僕もちょっとどうかと思った。

管理人さんとサバサバに乗せられて、参加してみたけど、使い古された感もあって微妙だ、というのが正直な感想。

日常の何もかもを、フィクションのように面白く彩りたいという青春依存症。

若気の至りとも、言えるかもしれない。

とにかくそんな現在進行な黒歴史。

「ところでエリイくん」

「何です、裁判長」

「昼間の女の子とはどこまでいったのかな？」

「ちょっと近所の公園まで」

「ただいまー、千雨」

「遅かったじゃん。テンコーサーくんはしっかり観察できた？」

「うん。アヒルと裁判ごっこもした」

「……鳥？」

003・苗くんと仲間な愉快たち（後書き）

木乃香のキャラも京都弁も分からない……。

これでいいんでしょうか？

違ったとしても作者の木乃香さんのイメージはこんな感じなんで、
簡単には直せないんですが（汗

京都弁は指摘があればすぐに直します。

004・コーミになった夜に

ここでひとつ、麻帆良全域を覆う結界について簡潔に説明しておこう。

結界の主な効果は二つ。

一般人に対する認識阻害。そして、外部からの侵入者の察知。

しかし、麻帆良のトップは大妖怪である。（サバサバ談）

つまり麻帆良はぬらりひよんの領土であることを考慮せねばならず、結界にもぬらりひよんによるぬらりひよん的な何かの仕掛けが施されているのかもしれない。（マヒル先輩談）。

確かにぬらりひよんは侮りがたしの称号を持つぬらりひよんなのでそれも納得である。キングスライム並みにすごい。

程度が分かりにくいとか言うな。僕だって分からない。

「キミも大概失礼な人だね」

イケメン的な何かかイケメン的な何かを言っているが、僕はこれでもエアリーディング検定とスルースキル検定の有段者なので、ここは華麗に決める。

「あー今日も空が青いなー」

「星空すら見えないけどね」

辺りは真っ暗だが気にしない。

話を戻そう。ぬらりひよんがいくらぬらりひよんであったとしても、やることやってくれれば、下っ端の僕には関係ないことだ。だからこの際スルーする。僕はこれでもエアリー以下略スルー以下略。

ちなみにこのエア―以下略スルー以下略はマヒル先輩とサバサバが問題作成、実施を行なったローカルな大作のだが、僕は以下略以下略なので以下略。つまり以下略。

以下略。

以下略。

以下略。

くだい。

つまり言いたいことがそれである。

麻帆良大結界のせいでツッコミ要員が過疎ってる。

僕の自虐からも分かるだろう。

分からない？

「それは残念」

「……何が？」

おっと。

「イケメンの顔が」

「……それって俺のあだ名、なんだよね」

イケメンなだけあって、僕が提唱したあだ名が広まるのは早かった。一週間で二十人弱は、かなりの成果と誇っていい数字のはずだ。さすがイケメン。名誉なあだ名のはずなのに彼が不満そうにしている理由が僕には分からない。

「もしかしてキングイケメンの方が良かった？」

「もっと悪いわ！」

違つらしい。

まあ誤魔化せたからいいや。

認識阻害のおかげでツツコミ要員が少ないという話。

具体的には、女子寮の階数が春休み中のうち三日間で一階増えていても、僕のクラスメイトの中でそのことに明確なツツコミの姿勢を示したのはひとりだけだったほど。

余談だが、彼女のフォローはルームメイトのサバサバが念入りに行なつたらしい。

既存の建築物を上には伸ばすつて、かなりすごいと思う。やばいとも思う。大丈夫なんだろうが、耐震強度的な意味で。それをカバーする技術力は僕のクラスメイトのT丸さんを見ていただければ、分かると思う。

部屋数に余裕が出来、そこに転入組の男子生徒たちを入れる。

こんなことをする学園長の意図が僕にはよく分からないけど、不自然さは結界のおかげで感じられず、それを感じ取ることのできる人間で学園長に意見できる人間はほとんどいない。

ちなみに僕は飛び入り参加だったため、部屋が用意できず、今年からマヒル先輩が住み込むことになった管理人室とその奥の扉から続く居住スペースに住まわせてもらっている。同棲と言うことなかられ。ルームシェアである。僕を転入組にねじこんだのはマヒル先輩だからそのくらいの責任は取ってもらわないと困る。

マヒル先輩が女子寮の管理人になつていることについてはもう諦めるしかない。彼のシスコンぶりはすでに女子寮内に広まっているようで、妙な信頼をされている。新しく入ってきた転入組の男子たちよりよっぽど信用できるのだとか。

入寮三日目で荷解きを終えないまま女子校に入学を果たした僕は、五日目にしてようやく荷解きを終え、十日目の今日、麻帆良の森の中に立っている。

繰り返すようだが、麻帆良大結界にはふたつの機能がある。認識障害についての機能がひとつ。

もうひとつが、外部からの侵入者の察知。

麻帆良は関東魔法協会の本部で、トップもここにいます。となれば必然、東と不仲な西の過激派がやってくる。そうでなくたって、最新のものから大戦以前の貴重なものまで多数の書物を収めている図書館島があるため、それを狙いにやってくる身の程をわきまえないトレジャーハンターもいます。

そんな奴らを察知するのが結界の役目。交戦し排除するのが、魔法先生や僕たち魔法生徒の役目だ。

関西呪術協会からの正式な指令書は確認済みだ。ボスからの手紙も来ていた。出張扱いにしてくれるらしい。ボスに感謝。

「この仕事が終わったら、B S Sの自販機探して缶コーヒー買うんだ」

「この仕事が終わったら、彼女と結婚するんだ」

……イケメンのくせに彼女とか（笑）。

「やっぱりそのあだ名悪口だよな!?!」

「あれー?」

「しっかりと口に出てたから」

納得。

しかしこれには色々深いわけがあるんだ。二人でわざわざ死亡フラグを立てるくらい深いわけが。

「せつかく乗ってあげたのにまともな反応しないし、変なあだ名は広めるし。この機会にキミには俺との接し方を、……語ってやる予定だったが、どうやらそうも言っていられなくなったらしい」

「侵入者？」

「おそらく」

イケメンはコーミになって、ポケットから薄い板を取り出した。通信機だ。大きさ太さは最新式の携帯（麻帆良製）と同じくらい。でも通話のみに絞って機能を比較するなら、この見た目何の変哲もないただの黒い板が圧勝する。

発信機としての役割も果たす優れもの。

どこでも使える壊れない無線を指摘したものらしく、科学と魔法のどちらの方面からの妨害があっても、常に最高の音質で通話できると説明された。子機であるこの板からは親機にしか通信できないが、戦闘時の緊迫した状況での連絡を想定すると、発信の際に通信相手を選ぶ手間が掛からなくていいとのこと。

当番の者は各自必ずこの通信機を携帯することになっている。

「こちら神海、状況は？」

『そこから北西一キロの地点に侵入者です』

この通信機、必要がない限りは常にスピーカーモードになっているので会話の内容は僕にも聞こえる。

「応援は？」

『予想到着時刻は戦闘開始から十分です』

「了解」

通信を切り、通信機をしまっコーミ。

「行くぞ弾場。十分で終わらせる。足手纏いになるなよ」
「あいよー」

お前もな、なんて言わない。
なんかそれって青春っぽいから。

こんな戦闘の日常が僕の青春だなんて、最悪だよ。

えーくと神海のペアが敵と交戦中。
そんな通信をもらったのが十分ほど前。

本来、救援要請もないのに別の区域の担当ペアが援護に向かったりすることはない。しかし彼らは魔法生徒のみのペアの上、一年間一般生徒として生活していたえーくんの実力を疑問視する声も上がり、初回のみ、担当区域も近く、二人のクラスメイトであり、もしもの時に連携も取りやすいだろうということ（クラスメイトだから連携が取れるという論理が私にはいまいちよく分からないのだが）、私と龍宮のペアが様子を見に行くことになっている。

私としては、神海レイジの実力を疑わないで、えーくんの実力だけを疑うのはちょっと不満だ。「悠久の風」に所属しているからなんだっていうんだ。えーくんだって十年以上も神鳴流を修めているんだ。

「えーくんは顔がいいだけの男になんか負けない」

「いや、弾場と神海はペアだからな」

「えーくんは真面目ではなかったし、太刀筋もいまいちパツとしな
い人だったけど、ちゃんと私と一緒に修行もしたし、一緒に雑魚寝
したことだって……！」

「桜咲、途中からのろけになってる」

「……どこが？」

「ダメだこいつ」

私も龍宮もそれほど心配しているというわけでもなかったから、
そんな話をしながら森の中を走り、そして現場に到着。

「なあ龍宮」

「なんだい」

「私たちが来る必要は……」

「なかったと思うよ」

侵入者と思われる、身体に大きな光るネジが数本生えた男を拘束
する神海。その向こうで、残党である消えかけている鬼、こちらも
脇腹と肩からネジが生えているが、その鬼と交戦……ワンサイドゲ
ームをしているえーくん。

それが私たちの見た現状だった。

アレを使う必要すらなかった。

事前に聞いてはいたが、コーミの使う術（？）はかなり便利で、そして特異なもので、中空に光る巨大なネジを生み出し、自動追尾機能を持ったそれを相手に刺すというものだった。生み出したネジは、物理的な衝撃は発生させるが肉体を傷つけることはできないというワケの分からないもので、さらには刺された者の身体能力や魔力や気を神海と同じレベルまで下げるといふオプション付き。

学園長も言っていた通り、確かにこの術は西洋魔術などではない。日本固有の呪術にも相手の魔力や気を制限するというものがあるが、コーミの使う術ほどお手軽にはいかない。

イケメンは、不思議ちゃん属性を持ったイケメンだったらしい。うええ。

本人は、ぶつくめーかーかつこかいとか、神様から貰った能力だとかほざいていた。このことから彼が不思議ちゃんであることが窺える。

中身はどうあれ、便利な術なのは確かで、僕はコーミと同じレベルまで肉体が弱体化した鬼たちをばったばったと切り倒していくだけでよかった。

初めは偽装のため、ボスに引き抜かれてからは護身のためにたしなんでいる神鳴流だが、さすがに十年もやっていると実践に耐えるレベルにはなっているのだ。こんな敵を相手にヘマをしているようでは、後で応援に来ることになっている刹那に何をされるか分かったもんじゃない。昔のように「修行だ特訓だ」とか無駄に情熱を燃やして剣術に打ち込むのは、ちときつい。

……最後になった鬼一体を還して、本部に通信を行なっているコーミのところに行く。

「はい、侵入者を無事拘束したので、回収のための人員をお願いします」

『その位置だと二十分ほど掛かりますのでそれまでその場で待機しててください』

「了解です」

通信を切り、ポケットに。

「おっつー、コーミ」

「おつかれ。……今は神海なのね」

「は？ だってコーミはコーミでしょ」

「それを教室で言っただけだった」

初任務が何事もなく終わったというのになぜかしょぼくれるコーミ。やはり彼の倒す分も鬼を残してあげるべきだったんだろうか。鬼との本気の殴りあいつてなかなか経験できないよね。あ、でも、あの術はコーミの術なんだから、コーミは鬼との殴り合いには慣れているのか。

「いや、せっかく自分の力に頼り切っている相手を弱体化したんだから近代武器使おうよ。拳銃とか」

「おー、そーか。コーミって気は一般人レベルだし魔力に至ってはほとんどゼロだから、銃が凶器に変身するわけだ」

「拳銃はもともと凶器だけだね。それと俺のネジを受けたわけでもないのに、気も魔力も俺とほとんど変わらないキミにそんなことを言われたくはない」

「あはは」

「……………」

「あはははー」

侵入者の男が無事回収され、再び森の中で二人、侵入者を待つ。

「そついえば、あの光るネジってどのくらい残り続けるの？」

「俺が消そうとしなければ一日くらい」

「……可哀想に。頭にネジが刺さった彼はフランケンというあだ名と一生付き合っていくことになるんだね」

「俺はお前の頭の中が可哀想だ」

「イケメンも同窓会とかで『あ、イケメン（笑）じゃん。ちよーウケるー』とか言われるんだよきつと」

「……………」

可哀想に。

004・ユーミになった夜に（後書き）

イケメンの能力は「めだかボックス」より。

作者は「めだかボックス」も知らない。けど「却本作り（ブックメーカー）」は知っている。ただし詳しく知っているわけじゃないので不自然な点を指摘されても修正できません。本作品に登場するのは「却本作り（改）」ですから。

005・サバイバルって辛いよね！。(前書き)

いろんな「ネギま！」の二次創作を見てきたけど、中二の時のキャンプの話を読んだことはない作者。

もしかしてキャンプはないって設定でもあるのでしょうか？

005・サバイバルって辛いよねー。

女子校生活といっても、所詮は周りの学友たちの性別が変わったというだけ。真新しさに心震わせるのは初めの一週間くらいで、それを過ぎてしまえばもう今までの男子校生活と差異はない。クラスからちよつと浮いてるっただけで。

まあ僕が浮くことによって誰かさんが学生生活を堪能できるのなら安いものだ。

非日常が日常になりつつあった四月下旬。

青春探求家の僕としては、そろそろ何かをしなきゃいけないなっと思ってはいたけど、その何かに明確なイメージがないってのが青春な由縁であるわけで。漠然とした不安はいつも胸の内に寄り添っていた。

そんな僕に朗報。

きっかけはクーフェだった。

「エリイ、ちよつといいアルカ？」

「アルアル」

クーフェは「古」に、なんかうねうねした文字を書いてクー・フェイって読むらしいけど、漢字が難しくてよく分からないアル。留学生で中国武術（？）の達人、中国系だと思うけど、本当のところはよく分からないアル。

「それはよかったアル」

「アルアル」

「ゴールデンウィークは、」

「あるアル」

「……………」

なにこの可愛い生物。

と思っただけど口には出さない。

だって僕は青春探求家ですから。

関係ないだろとか言わない。

なーんて脳内会議してたら、後ろからはたかれた。

「ちょっとエリィ、あんた何クーフェ泣かせてんのよ」

「そうやえ、えーくん。女の子いじめたらあかん」

丸めたノートで頭を叩いたのが神楽坂明日菜。通称バカレッド。きちくのしよぎょうやえー、と言いながら僕の脇腹を指でツンツンいじめているのが木乃香。木乃香と神楽坂はルームメイトで、よく一緒にいる姿を見かける。

ちなみに僕のエリィというあだ名は、イケメンがイケメンであるのには及ばないけど、サバサバを発端としてかなりの速度で広がった。でもえーくんの方は言わずもがな。刹那だけは僕のことを「えー弾場」って不思議な呼び方してるけど、接頭辞「えー」が表す意味を答えなさい。制限時間は十秒。配点は三点です。

解答？ 知らないよそんなの。

「私としましても今回の事件はまことに遺憾でありまして」

「ちゃんと謝りなさい」

足を踏まれた。神楽坂踏みつけたった。

「謝るときはきちんと謝る。それが男ってモノなんだぜ」
「で？」

「ごめんなさいクーフエさん僕が悪かったです泣かして悪かったです許してください」

「……泣いて、ないアルヨ」

上目遣い強がりクーフエ。

これやばい。

教室から出て行こうとしていたイケメンが爆発した。

僕は彼の死を無駄にしないためにも必死に耐えた。

木乃香と神楽坂は苦笑いしていた。

だからなおさら倒れるわけにはいかなかった。ここで倒れたら、僕たちが無能だということを証明しているようなものだ。僕たちは必死にこの青春時代で心のサバイバルを繰り返しているのに「男子ってバカよねー」の一言で済まされる屈辱を味わってなるものか。

「ほんとアルヨ？」

無駄な抵抗だった。

どっする？

たたかう

どっぐ

こったい

にげる

いけめん は しんでいて こったいできない

どっする？

たたかう

どうぐ

こうたい

にげる

ほんとうに にげますか？

YES

NO

のろわれていて にげられない

くーふえ の こうげき！

えりい は しんだ

しんでしまうとは なにごとだ

仕方ないんです先生。

それが男ってモノなんだぜ。

世の中って綺麗なことばかりじゃない。

イケメンだってトイレに行かなきゃいけないし、僕だってそうだ。

そんなわけで転入組の男子生徒たちは職員室の隣にある職員用男子トイレを使っている。先生なのに男子なところに突っ込んではい

けない。正式には男性用トイレとでも言うのだろうか。

死んでしまった僕を教会で復活させてくれるような誠実な神父さんは麻帆良にはいないので、男子トイレにてよみがえらせてもらった。これも「クーフェ」の「のろい」が、死ねば自動的に解除される良心的な設計だったおかげだろう。

僕は掃除道具入れにあったモップを装備し、再び魔王と相対するため旅に出た、なんてことはない。

廊下はもう夕暮れに染まっていた。

教室の前に着くと、ちょうどサバサバが出てきた。いまだ入口付近で倒れているイケメンのことは完璧スルーだった。

愛の反対は無関心。

「脳みそリストラするべき」

僕はイケメンに勝った。むなしさが残った。

「僕はお前らを捨てたりなんかしない！」

「……………」

「もしかして、リストラクション再構築って言いたかった？」

さばさば は にげだした

今日授業でやったもんね。restruction＝再構築って。授業内容を自分のものにしようとするその姿勢は高評価だと思うよ。

教室に入る際にさりげなくイケメンを踏みつけて（愛の反対は無関心だ）、何事かを話し合っているクーフェ、木乃香、神楽坂と忍

者のもとへ戻った。いつの間にか一人増えている。

「エリイ殿、無事だったでござるか」

「ちよつと神殿トイレで復活してきた」

「重畳でござる」

神楽坂が丸めたノートを持った手をふるふるさせていたけど、なんだっただらう。

がたん、とイスを鳴らしてクーフェが立ち上がった。

「私、大人になるアル！」

そのセリフはバカレンジャーを卒業してから言つべきだと思つた。

がたん。今度は神楽坂だった。

肅々と僕の方に歩いてくると、にっこりと笑った。神楽坂踏みつけた。さすがバカレンジャーなだけある。敵認定された奴らは容赦なく殺すヒーローモノの残酷さを兼ね備えている。

「エリイ、サバサバをかけて私と勝負アル！」

さっきの一幕は流すらしい。

「……そもそもこの国の憲法にはどんな人間でも皆等しく同じ人間だという記述があつてだな」

「まさかエリイが真面目に返してくるとは予想外だったアル」

「失礼な。僕だって真面目にやることくらいアル」

「やっぱり真面目じゃなかったアル」

がたん。神楽坂だった。神楽坂踏みつけたった。

「木乃香、僕にはよく分からないんだけど、なぜかさっきから足が痛むんだ」

「奇遇やなー。ウチにもよう分からん」

「神楽坂さん、僕にはよく」

「死人に口なしよ」

……

……

「明日菜はなー、きつと『罪人にはあれこれ文句言う権利ない』と言おうとしたんやってウチは思うんよ。明日菜は悪くないんや。理解してあげれんかったウチらにこそ責任が」

「やめて木乃香、惨めになるだけだから」

「話が全然進まないアルー」

困り顔クーフェ。

「エリイ殿！」

今度のチャレンジャーは忍者だった。

「3-Aの有志で、今度のゴールデンウィーク中にサバイバルキャンプを開くことにしたのでござるが、エリイ殿は参加いたすか？」
「もち」

攻略終了。

エリイ城は陥落しました。

……

……

「ちなみになー、『大人になる』いうんは『大人の狡猾さを獲得する』という意味で使ったんや。真面目に話を聞いてくれないえーくんもサバちゃんが絡めば話を聞いてくれるかなって思ったらしいんよ。それで『狡猾さ』や。でもそのまま使うのはひねりがないからゆーて、『大人になる』って言ったんやって」

「へー、クーフエの言葉にはそんな深い意味が」

「あんたたちはそれをわざとやってるから性質たちが悪いのよ……」

「何のことや、明日菜？」

「もういいわよ」

この日、夕暮れの教室で物憂げにため息をつくバカレツドの貴重な姿が目撃されたとか。

なぜサバイバルキャンプなんてものを開催することにしたのか。まずはそこから説明するべきだろう。

忘れている方も多いと思う。中学二年といえば、日本の学生のほとんどが経験するあの重大なイベントが開催される年である。そう。

キャンプ。青春時代を生きる僕たち中学二年生にとって忘れようにも忘れられない出来事になるだろう学校行事。そのための練習がサブバルキャンプver.2-A。

ところで、麻帆良学園女子中等部のキャンプは五月中旬に行なわれる。

お祭り大好き2-Aの面々が、このイベントを忘れるはずもない。(ゴールドンウィーク明け、キャンプの直前に行なわれる中間テストについては、眼中にない生徒が多いように思われるが…)

とにかく、キャンプである。

そしてこの麻帆良流キャンプ、さすが麻帆良と形容すべきことが一点。

リアルキャンプであるということ。

一般的な中学二年生が経験するような生ぬるいキャンプではない。僕らを優しく包み込んでくれる母なる大地、大自然を味わうなんて機会じゃない。味わうのは自然の冷たさ、僕らへの無関心さ。

生きるということを学ぶ。

それが厳しくも優しい麻帆良流サブバルキャンプだ。

なーんて恰好つけてみたけど、要するに毛布とテント渡すから、

あとは勝手に生活しろという企画。

食料の持ち込みは可だし、調理器具も可。おやつのは価格制限もなし。

むしろそこらへんに生えてる草とかキノコとか果物っぱいものとかを食べたい場合は、キャンプに同行している専門のインストラクターの許可を得なければならぬ。

中学生のキャンプなんてそんなもんです。

大抵の学生たちがスタート地点近くでテントを張って、あとは駄弁って終わり。

……でも、2-Aの奴らがそんなことで終わるはずがない。きっと「ジャングルの奥地の未開地域を探検だー」とか言って、無駄に頑張ってしまうに違いない。

日本にジャングルはないとかツッコミ入れる奴は、青春的に負けている。

いいじゃないか、ジャングルじゃなくても。未開じゃなくても。大事なのは楽しみたいって気持ち。だってこの時間は人生に一度しかないものだから。バカみたいでも、アホなことしか起こらない日常でも、僕は楽しんで過ごしたい。だって僕は青春探求家だ。こんな恥ずかしい肩書き、バカじゃなかったら名乗れないだろ？

ガラになく熱く語ってしまったあの時の自分を回想するとちよつと死にたくなる今日この頃。でも僕は自重しない。こんなことで死ぬくらいなら初めから青春を求めたりなんかしない。

なんてことを思った自分に死にたくなるっていう無限ループ。

青春って青いなー。

ところで今朝は生憎の曇り空だったけど、だんだん晴れてきたね。この調子なら夜には星が見えるんじゃないかな。

聞いてない？ ですよねー。

でも僕は思うんだよ。なんで同じ寮に住んでいるのに現地集合にするのかなって。だって同じトコに住んでるんだよ。わざわざ同じ場所から出て、同じ待ち合わせ場所で無意味に時間潰すくらいなら、みんなで一緒に行けばよくない？

確かに集団で移動するっていうのは迷惑になりやすいんだけどさ。分かってるよ。うん。分かってる。

でもそれに納得できるかって別だよな。

中学校で集団登校しない理由を持ち出されると、僕としてはちょっと反論が思いつかないんだけどさ。

例えばさ、デートの時に約束の三十分前から待ち合わせ場所で待ってるとかよく言うじゃん。そこで相手を待ちたいって気持ち。あれは理解できるんだよ。

でもこれデートじゃないじゃん。本番のキャンプのための練習だよ。本番でスタミナ切れ起こさないためにも、ここはいつものペーすで通過すべき場所だと思うんだよ、僕は。

「ちよつとエリイ」

「ん？」

「あれ」

神楽坂に声をかけられた。彼女が指さした場所に目を向けると、僕を見て震える二人の女子生徒の姿。

ぶつちやけ、綾瀬夕映と宮崎のどかだった。

「ゆ、ゆえ〜」

「大丈夫ですのどか。お化けは昼間に活動できないと聞きます」

「でも、それならエリイくんは誰と」

「あの人はちよつと頭がアレな人なので仕方ないのです。あれは独り言です。私が保証するから安心します」

「よ、よかつたあ〜」

あれえー？

「うわ。なんかこっち来たです」

「どどどどどっしよう、ゆえ〜」

「逃げるが勝ちです。行くのですのどか」

「ま、待ってよ〜」

……

……

「自業自得よ。慰めないからね」

「じー」

「な、なによ？」

魂の抜けたような瞳で見つめていると、神楽坂はたじろいだ。

「じー」

面白いので続ける。

「じー」

「こ、今回は間違っていないはずよ」

「本当に？」

何のことか分からないが取りあえず、神楽坂に合わせておく。

「えー!? だって自業自得ってそういう意味じゃ……。もしかして

違うの！？ や、どうしよ、え、でも間違っていないはず」
「……本当に？」

何のことか分かったが取りあえず、神楽坂に合わせておく。

「もしかして自問自答。いやそれはないわよね？ でももしかしたら……。あーわかんなくなってきた。自画自賛？」

「自由の女神」

「それはない」

ぶつぶつ悩んでいるところにせっかくヒントを与えてあげたのに、即座に切り捨てられた。

「……自業自得で合ってるよ」

「よかったー」

胸を撫で下ろす神楽坂。

その笑顔が……その、心拍数に影響大です。
と思っていいたら、すぐにこちらをじとーって睨んでくる神楽坂。
名残惜しいなんて思ってない、はず。

「じゃあなんで」

私のことをあんな目で見っていたの？

「なんでかなーと」

「何が」

意味もなくはぐらかそうとしてみたけど、やっぱり意味はなかった。

「いや、綾瀬たちは僕のこと怖がってたのに、なんで神楽坂は……
って」

「さあ？」

分からないのかよ、自分のことなのに。

「そんな目されたって知らないわよ」

「じー」

「……私はあんたみたいなアレな人でも受け入れてあげる心の広い
女なの！」

「うわー」

「なんでそんな目で見るのよ！？ あんたが言えっというから私は」

「このちゃんチョーップ」

神楽坂が暴走し始めたところで、木乃香の助け舟が後頭部に直撃。
僕は座礁した。ヒーロー漫画の敵の怪人が倒れる感じで地面に伏す。
ぐへえ。

「たったいま神楽坂明日菜一人仕入れたえー。誰かー、出来立てほ
やほやの明日菜はいらんかえー？ 安くしとくえー」

「ちよ、ちよつと木乃香！」

ナイス木乃香。そのまま神楽坂を引きずって行ってくれ。

「だいじょーぶ？」

よく分からない何かに敗北した僕を心配してくれる女の子、サバ
サバ。

でもね、サバサバ。僕の手を踏んでたら、全部台無しだよ。

集合時間五分前、十四時五十五分。

こういうときは無駄に行動力がある2-A。
遅刻者なく、全員集合完了。

「みなさん、これで全員そろいましたわね」

『おー』

合唱。やっぱりこういうときは揃わないとね。

「それではここからはクラス委員長である私、雪広が引率を務めさせていただきますわ」

引率って言うても目の前の建物に入るだけなんだけどね。

『キャンプの大山』

文字通り大山さんが店長を務めている（未確認情報）キャンプ用品の専門店だ。キャンプ用品専門って採算取れるんだろうか、という疑問は抱いちゃいけない。それが麻帆良クオリティ。

しかしこの大山、ただの大きいだけの山となめちやいけない。なんと、大山はキャンプ体験ができる大山なのだ。キャンプ大山はキャンプ用品の専門店であると同時に、店の背後にある、店長直々に

切り開いた（未確認情報）麻帆良の森林地帯を用いてキャンプ体験まで出来てしまうという採算度外視の店なのだ。

田舎へ行くとたまに見かけるキャンプ体験ができる旅館の、店舗バージョンである。でもあれは土地代が安いから商売として成り立つのであって麻帆良で同じことをやっても利益が出るとは思えない。が、麻帆良の人たちの性質ゆえか、潰れずにやっているみたい。考えてみれば、僕たちが、その「麻帆良の人たち」の筆頭なのだろう。

普通の中学生はキャンプがあるからといって、休日を潰してまで予習（？）をしようとは思わない。

とにかく。

そんな『キャンプの大山』に僕たちは来ていた。

いいんちよさんを先頭に、みんなでキャンプ用品が所狭しと並ぶ店内を通り、店の裏口を抜ける。するとそこには草の一本も生えていない過酷さを体現したような大地が広がっていた、なんてことはない。草抜き・除草剤散布を怠った小学校の校庭くらいのものだろうか。広さもそのくらい（麻帆良基準にあらず）。サバイバルな要素がゼロだ。

期待していたメンツには悪いが本番のキャンプの練習なんだから、安全安心設計じゃないと。ちゃんと森の奥のほうに行けないようにフェンスも張り巡らされているみたいだし。及第点かな、と専門家気取りで評価してみたり。

「では、みなさん。ここからは自由行動となりますが」

うんぬん。

いいんちよさんが細かく注意事項を説明してるけど、聞いている奴なんてほとんどいない。話す内容とかしっかり考えてきたんだろ

うな。みんなが揃うまでカンペで最終確認してるみたいだし。
御愁傷さま。

「何か困ったことがあれば、私か、こちらにいらっしやる副店長の
北村さんに声をかけてください。北村さんは」

眼鏡を掛けた若い優男が手を振っていた。

いいんちよさんの話によると、北村さんは大学時代は登山部に所
属していてキャンプの経験も豊富なんだとか。ぱっと見た感じそう
は見えないけど、筋肉のつき方とか、やっぱりそっち系の人だ。着
やせするタイプなのか。

「これで一通りの説明は終わりですが、何かご質問のある方は」

「いいんちよさん」

挙手する。ここは是非、質問せねばならぬことがある。

「何です弾場さん」

「店長の大山さんはどちらに」

「……店長の羽山さんは、今日は休暇を取られて、家族サービスに
いそしまれていらっしやいます」

おしい。山違いか。

「おしくない」

隣にいたサバサバに突っ込まれた。

内容がどうかよりも、まずその事実が、なんとというか色々ダメ
だった。

僕のおいしくもない質問はそれきりでスルーされ、北村さんが短い挨拶を一言して、解散となった。

ここからは各自、夕食のカレーを作り始めるまでの二時間の自由行動。

無料貸し出しされているテントを組み立ててみるもよし。その中で昼寝するもよし。『キャンプの大山』店内に置いてある、野草やキノコについての本を読んで知識を深めるもよし。キャンプとの関係性は理解不能だが、ボール遊びをするもよし。修行するもよし。……お前ら何しに来たんだ？

とりあえず僕は一人用テントと二人用テントの二種を組み立てては片付けてを一时间繰り返すという変人タイムを経て、二種のテントのエキスパートになった。

何がしたかったんだろ。

反省中という紙を背中に張られている僕は、残りの一時間を筋斗に費やした。さっきの一幕は自分でも悪かったと思ってる。でも二度とやらないという保証はできかねます。

で、カレー作りの時間がやってきて。

『反省中』な僕はひとりで正座。これはつらい。

ついさっき木乃香が僕のところに来てきて言ったのだ。「えーくん、最近ちよっと調子に乗りすぎ」って。思い当たる節がないわけでもない。回想してみるとむしろ調子に乗ってたシーンしか思い浮かべられない。なんということだ。

それに加えて今日は木乃香にフォロー入れてもらってしまった。つまり自分の尻拭いすらできていない。

そんなわけで改めて深く反省した僕は、わいわいきゃっきゃな光景を前に正座で耐えている。今回はほんと反省しました。はい。

でも、これってある意味ご褒美なのかも。

別に変態的な性癖に目覚めてしまったわけじゃないことを先に言っておく。

だって僕の前では花の女子中学生たちが楽しそうにカレーを作っている。火が上手くつかないとか、野菜つてどのくらいに切るのだから、ルーって何個入れるのとか。騒ぎながら楽しそうに作ってる。イケメンは『悠久の風』の仕事があるみたいで、このイベントには参加できなかった。相当悔しがっていたっけ。

だから、こんなに楽しそうな2-Aの面々の姿を見ることができないのは僕だけの特権。

他のどんな同級生も味わえない、僕だけの。

もちろん僕だってあの中に入っていきたい欲求がないわけじゃない。

けど、実際に自分があの空間に馴染んでいる姿を想像すると、それもどうかなくて思う。これは僕が青春を追い求める理由にも直結していて、あんまり上手くは説明できない。

星が瞬き始めた空と、その下で火を囲む女の子たちをぼんやりと見ていた僕のもとにひとりの女の子がやってくる。

サバサバだった。

彼女はこういうとき、いつも僕のそばにいてくれる。

僕が望んだ時にはいつだってサバサバは僕のそばにやってきてくれて、そのことにすこしだけ、どきりとする。彼女がどうしてこんなに鋭いのか、僕は知っている。彼女の苦しみ的一端も。

そして、だからこそ、彼女は僕の数少ない理解者、おそらくたったひとりの理解者で。

「たのしめてる?」

「楽しめてる、と、いいなあ」

「こうやって僕たちは一緒にいる。
これが正しいことなのかすら、分からないまま。」

「えーくんえーくん。はい、あーん」

「あの、木乃香さん」

「あーん」

「これ、ルーの色が……」

「あーん」

罰ゲーム、なんだろうな。

せめて幸せに死にたかったぜ。ちくしょう……。

……
……

『ゴールデンウィーク明け、麻帆良新聞の隅っこに『彼女の料理を
食べて悶死した男』の姿を収めた写真が掲載されたとか。』

005・サバイバルって辛いよねー。(後書き)

タイトルには二重の意味があった。そんな第五話でしたー。

ゴールデンウィークも明けて、テストまであと一週間。

運命のサバイバルキャンプまで残り二週間だった。

2-Aは例外と言えるが、ほとんどのクラスはすでにテスト前モード。大会が近い運動部を除いてほとんどの部活動も休止期間となり、学力向上に努める日々がやってきた。赤点回避に必死になる者、今回こそは順位を上げようと実力を磨く者。中学校の学習とは無縁な知識を深めている一部の特殊な奴ら。

麻帆良に限ったことではないが、どこにだっているんな奴がいる。けど、ちょっとこのクラスは個性的すぎやしないか？

普通な奴が少なすぎ。てか、いない。

自画自賛しているわけでも無意味な謙遜をしているわけでもないけど、僕だって自分には「普通」なんて形容が適さないことくらい心得てる。

まあいいや。

そんなことよりも今は勉強。

女子校に転入した途端に成績が落ちた、なんてことになったら、男子校に送り返されかねない。今更それは、ちょっと、ねえ？

なんだかんだいって、ここでの生活は気に入っている。クラスにはサバサバが、寮に帰ればマヒル先輩がいる。過ごしやすいんだ。気を使わなくていいから。

それに、僕だってもう2-Aの一員なんだって、ちょっと自惚れている。クラスを去ることになったら、何人かは悲しんでくれないかなって。でもそんな三流ドラマみたいな僕の妄想が現実にならないように、やることやる。悲劇嫌いですから。

ひとつ、話しておかなければならないことがある。

けつきよく、「青春を探そうの会」は消滅した。

人間的な理由じゃない。そもそも存在する意味がなくなってしまったから。

同好会室は僕たちが集まるためだけの場所だった。青春を探すのに、決まったスペースは必要ない。

今は、寮の管理人室がもっぱらその役目を果たしている。

それに、それほどあの同好会に愛着があったわけでもなかったし、だから同好会は廃会。

下りてくる経費は今も昔も変わらずゼロで、わざわざマヒル先輩が来れない場所に、僕らの居場所を作る理由がなかった。

こういうのをなんて言うんだろう。

本末転倒とはちょっと違う、何か。

嫌いじゃない。

「むー」

「うならないの」

「だってー、つまんない」

「それはまだ勉強の面白さに気づいてないからなんだよ」

僕もサバサバと同じなんだけどさ。

「べんきょーが楽しいなんて言ってる人はみんなバカだよ。このつらさが分からないなんて、かんじゅせーがない証拠だよ」

「日本語の勉強をしましょう」

「むー」

さすがにサバサバも言っていることのちぐはぐさや理不尽さには気づいているようで、渋々ながら教科書の黙読を再開する。

僕も授業で取ったノートに目を落とす。

本当はこんな意欲のない勉強は無意味だと思っただけど……。

今日の帰り際、いいんちよさんにサバサバのことをよろしくと頼まれてしまったから。僕は知らなかったんだけど、サバサバはあまり成績がよろしくないらしい。バカレンジャーほどではないにしろ、バカレンジャーの二軍くらいの立ち位置なんだとか。

寮内では自室にいることよりも管理人室でマヒル先輩や僕と一緒にいる時間のほうが長いんじゃないかというくらいこの部屋に居ついているということ、風の噂で知っていたいいんちよさんが、僕を引き入れるのは時間の問題だったわけだ。

対価は、このノート。

（いいんちよさんが）授業で取ったノート（のコピー）だ。

持つべきものは友人だね。

サバサバも僕みたいな友人を持ってよかったと思っているよ。きつと。

「……そろそろ休憩にしよっか」
「やたー」

そんな冷たい目で見られたら、優しくしてしまっじゃないか。
僕だってサバサバには笑ってほしいんだよ。

時計を見ると、まだ八時だった。

おかしいな。七時半にマヒル先輩をコンビニに送り出して休憩をしたばかりなのに。そういえば七時に夕飯休憩もしたっけ。

言うまでもないことかもしれないが、サバサバは僕がせっかく夕飯に作ってあげた牛井には目もくれず、目隠しでカップ麺を作った。でも失敗してお湯をぶちまけた拳句に容器を倒してダメにしてしまい、「仕方ないから食べてあげる」とツンデレ風のセリフをわざとらしく言ってから牛井を食べた。

そんなセリフをサバサバが知っていることに驚いたけど、話を聞くとルームメイトの長谷川千雨さんの影響らしい。ちょっと意外だ。サバサバが影響を受けるほどルームメイトを気にかけていることも、長谷川さんがそういうことに詳しい人だったってことも。

「千雨のことは教室で言っちゃだめだよ。口止めされてるから」と僕に口止めたサバサバだけど、彼女は自分の小悪魔的な理不尽さには気づいていないんだろうな。父性本能をくすぐる子ですよ、まったく。

ちなみにカップ麺の後片付けは僕がやった。なんでだ。

「エリイ、お風呂行こ」
「りょーかい」

机にぐてえーと倒れていたサバサバに言われて、お風呂セットを

用意する。もちろんお風呂に浮かべる黄色のアヒル人形も忘れてはならない。

女風呂のほうはマヒル先輩の取り計らいで常時たくさんのアヒルが浴槽に浮いているらしいのだが、男風呂のほうはセルフサービスなのだ。僕はマヒル先輩の私物であるアヒル人形を持参すればいいだけの話なのだが、他の転入組の人たちは大変だろう。わざわざアヒル人形を買って持参するなんて。

……なんか最近、共同生活をするようになってますますマヒル先輩に毒されている気がする。

管理人室のすぐそばにあるエレベーターを使って一気に大浴場がある階まで。

男湯・女湯と書かれたのれんの前でサバサバと別れる。

「じゃ、また後で」

「うん」

今日初めて訪れるひとりきりの時間を思う存分堪能しよう。

更衣室で服を脱ぎ、数あるアヒル人形の中でも最も目がきりっとしているアヒル隊長人形と共に浴室内に突入、したのだが、そこには先客がいた。

「うーす、えーくん」

アヒル隊長は砲弾になった。

隊長、僕ら、隊長の勇姿は忘れません。死んでもこの目に焼き付けます。

「ちよ、おいひでえな」

「お前が悪い」

「なんで」

「理由が分からないなら、隊長二号をお見舞いする」

「……隊長って、このアヒルのことか？」

「アヒルってお前、隊長に向かってなんて失礼なことを！」

「いやエリイそのキャラやめろよ。うぜえから」

「分かればいーんだよ」

浴室には木乃香がいた、なんてことはない。

彼は、ある意味同僚であるイビ。転入組のひとりだ。

珍しい名字しているけど、ハーフの僕や、出身は聞いたことないけどちょっとくらい外国の血が入っていそうなイケメンとは違い、純日本人。

愛知と岐阜の境目にある木曾三川、木曾川・長良川・揖斐川の揖斐らしい。けどそんなことを言われたって知らん。イビはイビだ。いびってほしいんだろ。

「エリイは剣道やめて野球部にでも入れれば？」

「イビもディフェンスばかりやってないで、たまにはオフェンスもやってみるよ」

皮肉に皮肉で返す。

二人とも部活のことを言っているわけじゃない。そもそも僕は部活には入っていない。イビもそう、かどろかは知らないけど、少なくとも彼が運動部で活躍しているという話を聞いたことはない。

こんな場所でする話でもないの、この話題はそれきりになった。身体を洗って湯につかる。わざわざイビと距離を取るのも他人行儀すぎる気がしたので、一人分のスペースを空けて、さっきからずっと湯につかっているイビの隣に腰を落ちつける。

「で、二股エリイくんは結局どっちが本命なんだ」
「なにが」

即座に否定しても良かったけど、ここで個人名を出すとその人のことを意識しているってことで、二重にいじられることになる。

「とぼけんなって。近衛嬢とサバちゃんのことだって」

……パパラツチ朝倉のおかげで転入後すぐに校内の有名人になってしまった僕は、特に転入組の男子生徒から、こっぴどいていじられることが間々ある。どんな記事を書かれたのかは知りたくもないが、朝倉の手腕のためなのか、今のイビのように僕をいじる人はいても、軽蔑した視線を向けられたことは皆無とあっていい。

「その話は休暇前にも今と同じような状況でしたよね」
「あの時はイケメンがいたけどな。そっぴどいやあいつまだ帰ってきてねえんだっけ」

「仕事が予定通りに進まないなんていつものことだろ」
「だな。……で、エリイは話を逸らさないこと」

話を逸らしたのはイビだと思っただが。

「……木乃香とは久しぶりに再会した幼なじみっただけで、お前らが喜ぶような関係じゃないし、サバサバだっただけの同好会のメンバーだっただけだよ」

「つまり彼女はすでにいたけど、幼なじみの彼女もゲットしたくなっただけから女子校に潜入して偶然を装って再会、と」

「ごめんイビ。僕ら友達やめよう。マジで」

「ちよいちよいちよい、悪かった悪かったって」

浴槽から上がるうとする僕を必死で引きとめようとする、イビ。
男同士が密着しても誰一人得しない、はずなので、仕方なく浴槽
に戻る。

「アヒル隊長にさっきの無礼を謝ったら許してやろう」

「……私が間違っております隊長。数々の無礼をお許しください」

「ぶ」

いかんいかん。

「て、てめえ」

「ひゅーふひゅー」

口笛がふけなかった。

誤魔化せなかったのはきつとそのせいだろう。

「違うからな」

「ごっん、と一発拳骨を食らった。」

「うーむ」

思ったことをすぐ口に出してしまう癖は直したほうがいいんだろ
うか。

それから二人、無言でお湯につかっている。

「なあエリィ」

「なに」

「お前らって、なんなの」

そんなことを唐突にイビが言った。

彼の言いたいことはなんとなくだけど、予想がつく。

「ごめんね、僕とイケメンのペアはちょっと成果を上げすぎてるよね」

「違うからな」

こんな時に、ボケて無意味に誤魔化しなくなってしまるのが僕の悪い癖だ。

「お前とサバちゃん、この寮の管理人。お前は関西所属だし、あとの二人は一般人ってことになってるけど、どう考えても二人とも裏の関係者だろ」

「二人とも一般人だよ」

「嘘つけ。サバちゃんはまだしも、あの管理人は完全に黒だよ。高校行ってるはずの年でこの寮の管理人やってることもそうだし、噂によれば、お前を今回のテストケースに入れる時にもあの人一枚噛んでたらしいじゃねえか」

一枚どころか全面的にあの人の仕業なんだけどね。

「学園長に直訴できるって何者だよ」

「さあ。下っ端の僕たちが考えることじゃないでしょ」

「なに他人面しちゃってんの当事者さん？」

「……………」

「俺は正直、お前のことが分からん」

イビはため息をついて続ける。

「イケメンも言ってたけどさ、こうやって裏とは関係のないところでバカやってる分には、お前は面白い奴だよ。でもさ、もしもの時には……」

そこから先の言葉はなかったし、ある必要もなかった。

「イビ、この国の毎年の行方不明者の数って知ってるか」
「なんだよいきなり」

ちよつと身構えるイビ。

こんなところで障壁張るなよ……。

「バカ、僕は何の準備もなく襲い掛かるような短絡思考じゃない」
「準備してたら？」

「さあ」

「やっぱ怖いよお前」

「心配すんなって、僕だって人殺しは好きじゃない」

やっぱ怖いよお前、と繰り返すイビ。

「ま、そんなことはこの際おいといて。年間何万もの人間が死体すら上がらずに失踪しているんだ。意味、分かるよな？ 死体がなきや、殺人にはならないんだ」

「……………」

「なあイビ、お前の周りは善人ばかりだろう。魔法は人助けのためにあるって、心のどこかで信じているバカな奴らばかりだろう。それでいいんだ。そいつらの中にいれば、お前はバカだけど面白い善人になれる」

それからしばらく、イビは何も言わなかった。
そして、のぼせたわ、と言って浴槽から上がる。

浴槽の縁に頭を乗せて、天井についた水滴の数を数えていた僕。
そのそばを去る時、

「関西はそんなにづらかったか？」

そう訊いただけで、イビは返事を待たず、出て行った。

ぶかぶかとお湯に浮かぶアヒル隊長が僕を見つめていた。
その顔は心なしか、寂しそうに見えた。

どこにいても同じだよ、イビ。

「エリイ」

「おかえり」

風呂から上がって部屋に帰り、自習をしていたら、ほかほかにな
ったサバサバが帰ってきた。

普通なら、こういう時はちょっと気まずい雰囲気になるものなの
かもしれないな、なんてことを思いながらノートにペンを走らせる。

「三十分だけ勉強する」

「めずらしいね」

僕の横で教科書を広げて、あれほど嫌がっていた勉強を、自主的に始めるサバサバ。

「ありがとう」

「別に、エリイのためじゃない」

「そのセリフは素なの？」

「んー！」

教科書でぼかぼかと僕を叩くサバサバ。
やっぱりこっちのほうが、僕は好きだ。

い、いじめられるのが好きってわけじゃないんだからね！
……っげえ。

006・つんでる(後書き)

【つんでる】動詞。ツンデレな状態になること。また、その状態にいること。

e x ・彼女はいつも。

しばしば「詰んでる」と間違われることがあるが実際はまったくの別物。

この間違いのために「ツンデる」と表記することもあるが、稀である。

007・これぞ麻帆良流キャンプ！（前書き）

綾瀬夕映さんを馬鹿にしすぎたかもしれない。

007：これぞ麻帆良流キャンプ！

「あ、もしもし？ 久しぶり。今、時間大丈夫？ ……そう。じゃ、お願いがあるんだけど、前頼んでおいた下っ端、ちゃんと飛騨に潜り込めてる？ あ、そう。それはよかった。そ、仕事だよ仕事。心配しなくてもいつもの倍は払うって。聞いてないって？ そんなつれないこと言うなよな。迷惑料だと思って取っというよ。うん。今回はいつもよりちょーっと過激にヤっちゃってほしい奴がいるんだ。資料送つといたんだけど、届いてる？ ……そうそう。『協会』の奴ら。たぶんその三人だから。お願いね」

「みんな並べー」

早朝の校庭には二十台以上の観光バスと千人近くの群集。つまりは、麻帆良流サバイバルキャンプ開催初日の朝だった。

「並べやボケー」

熱血教師からやる気を取り除いたような間延びした口調で生徒を整理させる、神父の姿があった。

彼の前方には僕たち2・Aの生徒。

高畑先生は出張に行っていて、今回のキャンプには参加できないので、急遽担任代理として参加することになったのが、彼、カムイ

神父。ぼさぼさ頭にやる気のなさそうな目、要するに、脱力系男子。……脱力系神父？ だけどちゃんとしていけば無駄にイケメン。具体的にはイケメンくらいイケメン。わけがわからないよ。

脱力系ってところが全部駄目にしてる。なんでもっとちゃんとし
ないのだろうか。

カムイさん、知る人ぞ知る有名人だったりするんだが、それはまた別の話。

先日、教室に自己紹介をしに来た彼を見て、春日と龍宮が啞然としていたっけ。

春日は教会関係だから分かるけど、龍宮はなんだろう。面識があったのだろうか。

「てめえらバラすぞボケー」

整列しきる気配がない2-Aの生徒たち。

一部の格闘家とか忍者とか、あとは小学生っぽい双子とかが問題なだけなんだけど。

春日が双子に同調せずに抑えようとしているという、すぐくめずらしい出来事も発生中。これがいわゆる神父エフェクトなのか。

「さてここで問題」

「じゃじゃん」

「カムイ神父は何をバラすと僕たちを脅したのでしょうか。シンキングタイム、スタート！」

決まった……。

僕とサバサバのコンビネーション技。伊達に一年以上もつるんでない。

そこ、効果音だけなら誰でもできるとか言わない。

くだらねえ、と言って携帯をいじっている長谷川を除けば、心優しき僕の班員たちは、懸命にお題に取り組んでくれている様子。待ち時間暇だからね。こうやってうまく消化していかないよ。これだけの人数がいれば、ちよっとの移動だって膨大な時間が掛かる。しかもA組は点呼すら終わっていない状態だし。

「はいはい」

神楽坂が元気よく手を挙げたが……。

「かいとーしゃはピンポンと言ってから、かいとーすること」

さすがサバサバ。僕の言いたいことが分かっているらしい。

「えー」

不満そうに神楽坂が、「くん」

……言った。

「明日菜のはなー、不満を表す『えー』と、えーくんを表す『えーくん』を掛けたろうと思ってるの発言なんよ、きつと。明日菜のレベルについていかれへんウチらが悪いんよ、たぶん」

「違うぞ木乃香。神楽坂は頭が足りないのはもちろん、センスすらも足りなかった。それだけの話だ」

「二人によってたかっついていじめられる私って……」

しよぼくれる明日菜の肩に手を掛けた木乃香が一言。

「『死人に口なし』やえ？」

「わたくしめが悪うございました……」

「ピンポン」

「はい、綾瀬さん」

「誰かの秘密を暴露するです」

さすがバカブラック。

「サバサバさん、採点を」

「1点」

「ちなみに満点は」

「100点」

「つまり頑張った賞のオマケですね」

「ど、どうしてですー?」

「貴様それでも哲学者の端くれか!」

僕の言葉に綾瀬がビクツと身体を縮こまらせる。

「そんな安易な解答で点数を貰おうなんて笑止千万。もっと深淵を覗き込むような、多世界解釈に匹敵するような何かを、サバサバさんはお求めになっていらっしやるのだ!」

言うてからやっちゃったって思いました。 適當すぎた。

「……………」

ほら。綾瀬も僕の知ったかぶりに、うつむき、ぷるぷると震えて、怒って…………?」

「感動したです！」

突如顔を上げて僕の手を取る綾瀬。

「まさかエリイさんがそんなことを考えるほど真剣に哲学していたなんて……！！！」

「い、いや、あはは」

撤回すら出来ない状況に陥っていた。

でもやっぱりさすがバカブラック。僕の適当さに気づいていない。神楽坂の気持ちやすこしだけ分かった気がした。

「正直私はエリイさんを誤解してたです。ただの変態さんだと思ってたです。でも違ったです。エリイさんは哲学する変態だったです！！！」

きらきらした目で僕を見る綾瀬。

でも褒められている気がしない。あと、そんな大声で「変態変態」連呼しないで。切実をお願いします。

あー、でも本当に今更だ。どうしてあんな風に恰好つけてしまったんだろう。綾瀬以外には受けなかったことがさらに追い討ちをかける。サバサバなんて「お前は0点を取ることすらおこがましい」みたいな冷ややかな目を僕に向けているし。

「私、もっと考えるです。頑張つてエリイさんを納得させられるような解答を出せたら、是非「哲学研究会」に入会するです」

「お、おう。考えとくわ」

普通、逆じゃなかるうか。「相手が満足する答えを出せたら入部

資格を得る」的なアレだ。

「はいはい。ピンポンアル、ピンポンピンポン」

「クーフエは班違うからね」

さっきまで向こうにいたはずのクーフエが突然やってきた。

キミは問題すら知らないでしょ。てか、よく「ピンポン」って言うルール分かったね。素なのか？

「だめアルか？」

「ぐは!？」

遠くにいたイケメンが爆発した。と思ったらちびっ子双子にイタズラをされていただけだった。

「かいとーけんをしんてーします」

「えーくん似てへんよ」

サバサバの声真似できると思っただけだな。

「答えていいアルか!？」

「0点」

「ふえ!？」

「0点」

「な、なんでア」

「0点」

「……………」

ちよっとクーフエさんそんな縦るような目でこっち見ないで。サ

バサバはなんか機嫌が悪いみたいだけど、理由に見当がつかないのは僕だつて同じだから。

「ま、マグロアルよ」

「え？」

「マグロは一本釣りに限るアルよー!!」

「0点」

意味不明な言葉を残して逃げていったクーフェ。

きつと「マグロは一本釣り」が彼女なりの解答だったんだろう。

……今度、麻帆良一の頭脳を持つクラスメイトに、クーフェの頭の構造を研究してもらおうかな。

「一本釣りは普通、カツオじゃないのか？」

「ビンナガマグロって種類は一本釣りが有名ならしい」

「へえ。長谷川って意外と物知りだったんだな」

携帯に目を落としたまま、僕の言葉を訂正した長谷川。

くだらないって言うておきながらちゃっかり話は聞いているんじゃない。

「別に。ちょっとケータイで調べればそのくらいすぐ分かる」

「ふーん」

「言うておくが、聞いていたんじゃないやなくて聞こえてきたんだ」

「ふーん」

素直じゃない奴。

それにしてもサバサバがいきなり不機嫌になった理由が分からない。

でもこういうときに本人に尋ねると、相手は強情になって本当のことは教えてくれないし、さらに不機嫌になるだけって昔読んだ本に書いてあったから、訊くなんて愚行はしない。良かれと思って言ったことは、全部ぜんぶが警戒心のフィルターを通って、悪意を付与されてしまうらしい。

と、マヒル先輩が妹との接し方を、訊いてもいない僕に懇切丁寧に解説してきたことがある。僕に妹はいないんですけどね。

でもそれはサバサバにだって応用可能なはず。女の子ですから。

「ピンポン」

「はい、神楽坂さん」

リベンジなるか。

「エリイがなんで木乃香に『えーくん』と呼ばれるようになったのか、ここでひとつ」

「あれはなー、ウチがまだ三歳くらいの頃やった」

「ちよ、木乃香さん!？」

「まだ小さかったから詳しいことはよう覚えとらんのやけど……。ある日お父様がウチと同じくらいの背えした金髪のちびっ子を遊び相手につれてきてくれて、でも、遊び相手につれて来られたゆーのに、そのコはむすつとしとってなー。仕方ないからウチが一日中連れまわしたったんや」

「5点」

「えー、なんでなんサバちゃん」

「長い、終わりが見えない」

そんなせつしょうなー、とサバサバにまとわりつく木乃香。迷惑そうな顔してるけど、サバサバだってまんざらでもないはず。

「というかエリイ、もとは金髪だったんだ」

「目立つから染めたの」

「見てみたかったんだけどな」

「神楽坂には見せません」

「なんでよー」

並び立ち、じゃれあう二人を眺めながら雑談をする神楽坂と僕。
意地悪だねーエリイは、と言ってクスクスと笑う神楽坂を見てい
ると、なんかこう、不思議な気分になる。

「神楽坂って昔からそんな感じだったのか」

「なによ突然」

「いや、ちよつと気になっただけ。今度いいんちょにでも訊いてみ
るかな」

「やめてよね！？ 恥ずかしいんだから」

犬猿の仲って言われたりしているけど、いいんちょさんは神楽坂
のことを愚痴る時、すこしだけ楽しそうな顔を見せる時がある。こ
れも一種の友情なんだろう。

まあでも、いいんちょには悪いが、これは訊くまでもないことだ
ろう。

木乃香を見れば分かる。彼女が変わったように、神楽坂だって変
わってきたはずだから。

「えーくんはな、昔はな、」

「はい、ストーツ」

木乃香の勢いが収束しそうになかったので、これにて強制終了。

神楽坂はもう傍観者に徹するみたいだし、木乃香は暴走気味、綾瀬・宮崎の仲良しペアはやる気はあるのだが結果が出る様子はなし。長谷川はもとから不参加。そしてサバサバと僕は主催者側。これぞ班のメンバー全員。ということだ。

「サバサバさん。模範解答をお願いします」

そろそろA組もバスに乗り込むために移動する時間だろうし。

果たして、サバサバの答えは……。

「身体をバラす」

「……サバサバ、1点」

問題の意図を理解できなかった奴がここにもいた。

そりゃ、カムイ神父は僕たちに「並べ」と脅してるんだからその解答は誰でも思いつく。だからこそ、その前提を除いた上で、彼が今どんなことをバラすと言っているのなら面白いのかを考え、その解答の面白さを競い合っていたはずだ。

僕の説明が足りなかったのか。

自信満々で答えたサバサバの頭が足りていなかったのか。

「サバサバ、罰としてリュックサックの中身、バラそうか」

「どっち」

「さあ？」

どっちの意味でしょう。

麻帆良学園は言うまでもなくマンモス校だ。クラス数は一学年で二十以上。

それゆえにキャンプや修学旅行などの行事で、全クラスが一箇所へ向かうとなれば相当の混雑が予想される。しかし、AからE組は五月第二週に、F組からJ組は五月第三週に、というように時期をずらすわけにもいかない。

妥協案として出されたのが、クラスごとに行き先を変えらるというものだった。

積立金が不平等になり、また、特に修学旅行においてカリキュラムが異なってしまうことなどのさまざまな問題点が予想されるが、麻帆良パワーでなんとかなっているらしい。認識阻害結界さまざまだ。

……実際どうなのかは知らないけれど、こんな無理がまかり通っているということは、少なからず結界の影響が出ているのではないかと、僕は思う。

部外者の考えることじゃないけど。

三年次にある修学旅行とは違って、キャンプの行き先には生徒の意見は取り入れられない。我がクラスが誇る(?) パパラッチの記事によると、キャンプの行き先は担任教師たちが相談して決めていて、若い人が担任のクラスほどキャンプ地が遠くなる傾向があるん

だとか。

もちろんある程度のバランスは考えられている。各キャンプ地ごとに最低ひとりずつ保健体育の教師と広域指導員を兼任している教師がついているらしい。新任教師五人を、生徒百五十人強と共に富士の樹海に放り込みました、とかではいくらなんでも非常識だしね。そんなわけで広域指導員を兼任し、かつ年功序列で言えば中くらいに位置する高畑先生が担任である2-Aは、順当に危険度ランク中の飛騨山脈のふもと近くでキャンプを実施することになっていた。飛騨組唯一の広域指導員であった高畑先生が出張で急遽参加できなくなるといふハプニングもあったが、そこは新田先生に行き先を変更してもらってカバー。担任代理には、じつは麻帆良七不思議のひとつにすらなっている、カムイ神父を採用。

「そつえば聞いたことがあります。麻帆良には、並みの格闘家たちが束になつてもかなわない猛者がいるって」

「それ知ってるです。にんにくが弱点です」

「困ったときには空から降りてきて助けてくれるらしいえ？」

「タバコがトレードマークで、デスメガネとも」「それはウチの担任」

順に、宮崎、綾瀬、木乃香、サバサバ、僕。

綾瀬と木乃香が何のことを言っているのか、僕には正直よく分からない。予想はつくけど。

「あれでしょ、最強神父さん伝説」

神楽坂、正解。

「朝倉が言ってたけど、あの伝説の元ネタは何年か前の、麻帆良祭の時のあれ、なんか戦う奴、なんだっけ」

「天下一武 会」

「違うよサバサバ」

「まーいいわよそれで。とにかくその天下 武道会で圧勝したのがカムイ神父さんで、そこから七不思議にまでなったらしいわよ」

『へえ』

満場一致の「へえ」をいただきました。

「朝倉さんにはこの取れたてほやほやの僕の脳を」

「グロイ」

「……ごめんなさい」

サバサバに駄目出しされてしまった。

たしかに女の子の集団の中で言うには過激すぎる表現だったかもしれない。

誰も止めてくれなかったら、それはそれで寂しい思いをしたんだろっけど。

うん、やっぱり愛の反対は無関心だ。

基本的にはこんな感じでバス内の時間を消費していった班員たち。高速道路のサービスエリアで早めの昼食を摂って、それからはずっと携帯をいじっていて会話にあまり参加してこなかった長谷川も交えて、班員七名でウノをやった。

そうして、僕たち2・Aは五時間を越える長いバス移動を経て、飛驒にたどり着いたのだった。

007：これぞ麻帆良流キャンプ！（後書き）

あまり話が進まなかったけど、キリがいいのでここまで。

「へえ」のネタはテレビ番組「トリビア」より。今となつてはもう古すぎるネタだけど、ネギまの時系列では最新のネタのはず……。もしかするとまだ深夜番組だったっけ？ ま、いいや。

そうすると「わけがわからないよ」は時系列が完全に矛盾しますが、まああれはエリックんのフィーリングということで。偶然の一致です（笑）。作者も使うつもりはなかった。あれですかね。学友の口癖が原因ですかね。いるんですよ、「わけがわからないよ」が口癖になつてる奴がひとり。

008・これぞ麻帆良流キャンブー!! (前書き)

やりすぎた気がする……。

008・これぞ麻帆良流キャンプ！！

「風よ！ 大地よ！ 大空よ！」

「0点」

「うつ、……や、山が私を待っている……！」

「待ってない。帰れあほ」

やっぱり山に来たら叫びたいじゃん。
でもサバサバには不評だったみたい。

「エリイ静かにしなさい」

神楽坂にも不評。

「耳がきーんとしたアル」

「音波攻撃とは予想外でござる」

隣の班の格闘娘クーフエと忍者にも不評。

「キミには落ち着きが足りないね」

イケメンにすら不評。

常に髪をかきあげているイケメンのくせに僕を否定しやがった。
なんとという屈辱……。

「エリイさん元気出すです。だいじょーぶです。エリイさんは哲学
する変態さんですから、多少のことならみんな仕方ないと笑って許
してくれるはずです」

「ちょっと今から遭難してこようかな」

綾瀬の語尾が「death」に聞こえるようになってきた。

みんなして僕をいじめるんだ。ここにはいつも僕を助けてくれるマヒえもんはいないし。サバえもんは味方になってくれそうにないし。

ああ、きつとバチが当たったんだ。だってマヒえもんはキャンプに来れないことを相当悔しがっていた。きつと僕がいなくて寂しいんだろう。未来の意志はこうやって僕たちを翻弄するんだ。

……ないな。そもそもマヒル先輩は二十二世紀生まれじゃない。

「死人に口なしやえー」

「……木乃香、そのネタ気に入ったの？」

いくらなんでも引つ張りすぎだと思っただけだな。

「死人に口なしやえー」

「うん。僕には味方がいないことを悟ったよ」

男はつらいよ。

先ほどのバスから降りた直後の一幕に対して、僕の班員たちは軍事・経済の両制裁をしない意向を固めたらしく、今夜の夕食に辛い思いをすることはなさそうで一安心だ。

ゴールデンウィークの時はやばかった。

思わず頬がゆるんでしまつほど、僕はおかしくなっていた。

「女はつらいよ、です」

隣を歩いていた綾瀬が息を切らしながら言った。

「山道が？」

「そうです」

「でも、あれ」

指差す先には、元気一杯ではしゃぎまわっているクラスメイト。
主に運動部連中。

「あれと一緒にしないでほしいです。私はか弱い乙女なのです」

「何気にひどいよね、綾瀬って」

「どこがですか」

「無自覚なところとか」

うーむ、と唸っているけど、たぶん答えは出ないだろう。

そういうものだ。中学生に自分を客観視するなんて無理。僕も含めて。

くっくっ、と裾を引かれる。サバサバだった。

「持って」

「……いや、持ってって、自分の荷物くらいちゃんと持とうよ」
「ん」

サバサバの指差す先には、

「見ちゃいけません」

「なんで」

「あれは性犯罪者です。『YES ロリータ、NO タッチ』の原則に反します」

ぶ、と後ろを歩いていた長谷川が突然ふきだした。

どうしたんだろう。

どうしたんだろうじゃねえよ、カマトトぶんな、とのツッコミを頂きました。

それにしてもまさかイケメンがロリコンだったとは。

双子の片方を肩車しながら歩いているイケメンを見ながら、そんなことを思う。

予兆なら確かにあった。授業中視線を感じると思ったら、隣の席のイケメンがちらちらと、僕とサバサバをはさんだ向こう側の席に座っている金髪幼女に視線を送っていることがあったし。

まあでも、双子のほうもイケメンには懐いているようだし問題は無いのだろうか。

いやいやでも確か法律では、小学生相手ではたとえ両者合意の上であっても犯罪になるとか。よく分からないけど、高畑先生というストッパーがいらない以上、イケメンは逮捕されるべきだと私は思います。

「何気にひどいです、エリイさんって」

「どこが」

「無自覚なところかです」

それから僕たちはサバイバルキャンプのスタート地点まで約三分ほど山道を歩かされた。

サバサバは相変わらず荷物が重いとわめいていたが、僕は華麗にスルー。

体力の温存をしながらも、三十分の行程を消化していった。

班員たちに何かあったときには班唯一の男手である僕が率先して行動しなくてはならない。だからもちろん、班員たちの様子を確認することも忘れない。

なぜかキャンプにまでギターケースを持ってきている龍宮を見た綾瀬が「あれは人間じゃないです」と親友である宮崎に愚痴つたり。そして愚痴られた当人である宮崎はクラスメイトを怪物呼ばわりすることに抵抗があるのか、反応に困ってオロオロしていたり。長谷川が一言も話さず、携帯すら見ずに険しい顔をしていたり。

体力のない二名の班員とは対照的に、木乃香は、僕と立案した「刹那との仲を取り戻そう」作戦の遂行のために忙しく走り回っている。肝心の刹那は巧みに逃げ回り、神楽坂はそれを見て「元気ねえ」などとオバサンくさいことを言っていた。

笑っている奴も困っている奴も疲れている奴も、誰一人として本心からこのキャンプを嫌っているわけじゃない。

それがなんだか、僕には無性に嬉しく感じられる。

やっぱり青春ってやつは最高だ。

この空気はきつと僕たちにしか理解できない。

バカになれ。

利益なんて考えるな。

本当の「楽しさ」ってやつは、自己完結しない。

空気を伝って伝播する。

楽しさは伝染するんだよってどこかの誰かが言っていたのを思い出した。

山の中腹にある開けた広場のような所まで来て、一旦休憩。集団行動は基本的にここまでで、班ごとで整列してメンバーの確認をした後、残りの時間は自由行動。山の奥のほうまで進みたい班は、この広場で夕食用の携帯食料を担任からもらってから出発することになっている。

「お前らこついう時だけは早いのだ」

カムイ神父が呆れの雰囲気を滲ませていた。

いつも五月蠅くてなかなか整列しないはずの2・Aのメンバーがもうすでに整列していて、驚きあきれたのだろう。いとあさまし。

お祭り大好き2・Aがこんな場所で時間を無駄にするわけがないですか。クーフェなんて夕食そっちのけで飛び出そうとして忍者に引き止められているし。これで新田先生の諸注意が長引いたら暴発するだろ。

「エリイ、はいこれ」

「サンキュ」

前に並んでいる神楽坂からカリーメイトの箱が回ってくる。メ

イプルだった。一箱取って後ろに。自分で食料を持参していない限り、これが今晚の夕食になるわけだ。でも大抵の女子生徒はチョコレートやらクッキーやら、お菓子類を大量に持ってきているので、一食四百キロカロリーなんてひもじいことにはならない。

……いや、カロリー イトで生活したことないからよく分からないけど。でも夕食がアレだけってのは個人的にないと思う。

「あー、あー」

メガホンを持った新田先生が広場の中でも地面が一段高くなっているところに立っていた。

そこからはお察しの通り、長い長い諸注意です。

ゴミを捨てるなとか。迷うなとか。遭難するなとか。テントはきちつと立てるとか。川の水は飲むな、飲みたいなら沸騰させてからにしるとか。当然なことを長々と語る。よくそんなに注意事項を思いつくなあって感心してしまうくらいに。

生徒想いの先生だし、生徒の気持ちが分からないってわけじゃないんだろうけど。

でも、やっぱり誰かが言わなきゃいけないことってものがある。それを新田先生が引き受けているってだけ。

もちろん本人の気持ちを知っているわけじゃないから、無闇に擁護の声を上げることはしない。

「あー、それから男子生徒諸君は女子生徒とは別のテントで就寝すること。あとで個別に一人用テントを渡すので取りに来ること」

当たり前だ、うむうむ。

なんて風に頷いていたら、そこかしこから視線が集まっていた。

もちろん全部女の子から。

よせやい。照れるだろ。

神楽坂踏みつけだった。

「なんで!？」

「えーくん、しー」

指を一本立てて静かにしろのジェスチャー。

でも木乃香さんあなた僕の隣に並んでいるから思いっきり見てましたよね。神楽坂さんが何をしたか。

まったく世の中は理不尽なこと一杯だ。

さつきもロリコンなイケメンよりも僕に視線が集まっていたし。

なんですか。自分たちがロリじゃないからイケメンには襲われな
いと思っているんですか。だから僕を警戒するんですか。まったく
嘆かわしいです。僕はそんな軽い男ではありません。誰ですか、三
股男に進化するとかほざいた奴は。僕は誰とも付き合っていないと
言っているじゃないですか。

女ってほんと理不尽ですよ。そう思いませんか。

「エリイっざい」

僕の抗議の言葉はサバサバの一言で切って捨てられた。

百害あって一利なしだった。だって宮崎なんかは綾瀬にしがみつ
きながらおそろおそろこつちを見ている。僕はなんだ。ホラー映画
の怪物かなんかなのか。

心中に不満を燻らせていると、いつの間にか新田先生の諸注意タ
イムが終わっていた。いとあさまし。

各々勝手に行動し始めた生徒たちの間をぬって進む。

さつきまで新田先生が立っていた場所のすぐ近くには、運動会などによく見かける六本足のテントが本部として立てられている。先ほどの新田先生タイムを有効活用してインストラクターの方々がささと立てたものだ。

その本部の前には、各班の班長・副班長プラス転入組男子生徒が列を成している。

ちなみにウチの班の班長は神楽坂、副班長は綾瀬。一緒に行こうと思っていたのにおいていかれた。仕方がないので、お手紙書いた「さつきの手紙の御用事なあに」。そんなわけでシロヤギさんと僕もその列に加わった。シロヤギさんがいるから寂しくなんかないやい。シロヤギさんは僕よりちょっと背が低くて角が生えた可愛い女の子なのだ。

こんなに可愛い女の子が見えないなんて、みんな可哀想だ。特に男子。

渡さないけど。

シロヤギさんと話をしていたらいつの間にか僕の番が来ていたので、受け渡しを行っていた瀬流彦先生に一人用テントをもらい、班員たちのところまで戻った。

「この時の僕の行動によってまさかあんなことが起こるなんて、まだ誰も予想していなかった」

「大丈夫ですエリイさん」

「どーして」

僕の隣にいたサバサバがめずらしく他人の会話に口をはさんだ。

綾瀬も驚いている。

「いえ、そんな大層な理由はないですが、エリイさんは元々変人なので大丈夫です」

「なつとく」

「誰も根本的な問題には気づかないのか……」

僕ってそんなに変人なのか？

……

……

「エリイって自分がおかしいことに気づいていないのかな」

「『己が狂人であることに気づけないのが真の狂人である』とこの前読んだ本に書いてありました」

「本屋ちゃんも大概変わってるわよ」

という会話が神楽坂と宮崎の間で交わされていたことを、僕は後になって木乃香に聞かされた。探検道中のことであった。

予想通りなのだが、まずは運動部メンバーを中心とした2 - Aの武闘派たちが筆頭となって意気揚々と森へ進み、班員が散り散りになるわけにもいかないという理由で残りのメンバーが先行した彼女らに追隨する形となり、「ジャングルの奥地」探検がスタートした。踏み固められた道は「ジャングル」の名前負けにもほどがあるくらい平坦で危険もなかったので雑談の声もちらほら。

危険がないとはいえ、バスを降りてから歩いてきた道と比べればずっと危険なため、はしゃぎまわることをオススメできる環境ではない。刹那を追い回すことができなくなって暇そうにしていた木乃香が僕に話してくれたのだ。

神楽坂はそ知らぬ顔をしていたけど、宮崎は綾瀬の背中に隠れていた。でも僕ばかり見ていて背後への注意がおろそかになっていたから、音もなく近寄ってきていた早乙女に耳に息を吹きかけられる

イタズラをされて「ひゃっ」と可愛い声を上げていた。

別に宮崎に怖がられようが生活に支障が出るわけじゃないから、本質的にはどうでもいいんだけど、もっとうでもいい領域で気に入らなかつた。クラスの子に怖がられるなんて青春じゃない。ヤンキー漫画じゃないんだから。

かといって打開策があるわけでもないのでもうにもならない。こういうのは時間に任せるのが吉と相場が決まっている。

僕はカバンにつけたアヒル隊長ストラップと共に、キャンプ一日目を満喫した。

帰ったら、お土産としてマヒル先輩にこの泥だらけになったストラップをプレゼントしよう。僕はなんて優しい少年なのだろうか。

「ここにコンビニを建てればすべて解決アル！」
「なんと。もしやクーフェ殿は天才でござるか!？」
「楓、スコップを持ってくるアル。まずは穴を掘るアル」
「承知。拙者にお任せあれ」

夕食時。

カリーメイトと持ってきたおやつだけじゃ足りないと言げ出し、たクーフェと忍者を遠くから眺めて。

「なあ神楽坂、アレはあのままでいいのか」

「いいんじゃない？ そのうち自分たちで気づくでしょ。エリイも混ざりたいの？」

「いや、僕もさすがにあそこまでバカにはなれない」

「……ねえエリイ」

「何」

「どうにかしてあげたら？」

「……………」

気づいていたさ。

だけど僕はびつくり人間じゃないんだぜ？

知ってたか、神楽坂。

「サバサバ、コンセントがないと、ポットは使えないんだよ」

大きなリュックサックに最新式のポット（ゴールデンウィーク中に三人で買いに行った。お代はマヒル先輩持ち）と大量のカップラーメンを詰めてきたサバサバは縋るように僕を見ていた。

「温室育ちの電気ポットじゃ、この過酷な環境には適応できないんだ。これがいわゆる最新科学の敗北」

「話を大きくしすぎ」

「ポットなめるなあほ」

どちらが誰のつつこみだったのかは、言うまでもないこと。

仕方がないのでシロヤギさんに愚痴りながら、もそもそとカロリー

ーイトを食べる片手間でテント設置をした。大山さん家で鍛えた技術は伊達じゃない。

これで本当に一日目が終わってくれるなら良き青春の思い出だっ

ただけど。

僕たち裏の人間にとっては、ここまでが休憩、ここからが本番。

学園長が何考えているのか、僕には相変わらず分からない。

009・夜はお仕事です。(前書き)

春日美空さんの口調がさっぱり。違和感あつたら教えてください。
原作キャラを動かすのって難しい。原作と違わなかって気を使う。

009・夜はお仕事です。

日付も変わった深夜の森。

女の子と二人、川原で焚き火をしていた。テントからはかなりの距離がある。

逢引　などという甘酸っぱい出来事ならば、どんなに良かったことだろう。

お相手はクラスメイトの春日美空さん。転入初日にイケメンが掛かったトラップの数々を仕掛けた主犯のひとり。敬虔な(?)カトリックの彼女はこんな時でもシスターの修道服を身にまとい、色気もやる気もない大あくびをしている。

雰囲気があつたらそれはそれで困るので、今は彼女の性質に感謝なのだが。

よい子は寝る時間、そうでなくたって明日の探検に備えてキャンパス中学生は眠らなければならぬ時間だというのに、こんなところでしたくもない焚き火をしているのにはワケがある。

「な、私らいつまでこうしてんの?」

「日の出前にはテントに帰って連絡がくるでしょ」

「……暇。一発芸を所望する」

「そついうのは僕の役目じゃないから」

焚き火を二人で囲み、春日さんはそわそわ。彼女はずっとこんな感じだ。この年代の娘に落ち着きを求めるのは酷なのだろうか。楽しい楽しいおしゃべりの時間を放棄して、こつやつて魔法使いとしての労働に従事させられていることを考えれば、仕方ないと思わないこともない。

僕だって不満がないわけじゃないし。

学園長の指示で僕たち魔法生徒はキャンプ期間中は夜間、キャンプ場を警備することになっていた。

理解できないわけじゃない。

ずっと麻帆良の森というホームグラウンドだけで警備をしていて腕が鈍るといふもの。特に経験が少ない魔法生徒ならばなおさらだ。

現在、警備に従事している魔法生徒は二組で四名。コーミ・イビのペアと春日さん・僕のペア。刹那・龍宮ペアは今回はお休み……というか、刹那は木乃香を護衛するという彼女の本来の任務があつて不参加だし、龍宮はもともと雇われの傭兵で魔法生徒ではない。ゆえに参加の義務があるわけではない。

その他は本部の防衛に瀬流彦先生。そして魔法生徒の身に何かがあつたときにフォローをするのがカムイ神父。

この六名で今回の警備にあたる。

とはいえ、学園長がいるわけでも図書館島があるわけでもないこんな飛騨の山の中に敵襲がある確率はそれほど高くないというのが瀬流彦先生とカムイ神父の見解。あるとすれば学園長の孫である木乃香を狙う連中だが、その場合は刹那もいるし、本当にヤバい連中が来たときにはカムイ神父が本気を出してくれるらしいので、僕はそれほど心配をしていない。あの人の規格外さは、高畑先生のお墨付きだし。

いくら頼りになるカムイ神父がいるからといっていい加減に警備していいというわけではない。

麻帆良での警備の時のペアをそのまま継続するなら、順当に僕とコーミが組むことになるはずなのだが、そうするとひとつ問題が出てくる。春日さんとイビが残って男女ペアになる……のはあまり好

ましいいことではないが、それは妥協する。警備に参加する女子生徒が春日さんひとりだけであるため、それは仕方がない。問題は戦力にあった。

春日さんもイビも魔法使い見習いで、しかも二人とも攻撃魔法は苦手。それぞれ得意分野の幻影魔法と防御魔法についてはそこそこのレベルなのだが、この二人を組ませるのはやはり得策ではない。

そんなわけでカムイ神父の独断で、コーミ・イビペアと春日さん・僕ペアが決定された。

「イタズラしていい？」

「ものによる」

「……あー暇。つまんない」

後ろに倒れこんで仰向けになる春日さん。

彼女はもつと恥じらいを持つべきだと思う。

「頭痛い。砂利刺さった」

「じつとしてればいいのに」

「うるさい」

「短距離走でもする？」

「メンドい」

あー、これは末期だ。短距離走が好きな春日さんが勝負を受けないなんて。

「それなら春日さん、僕と賭けをしない？」

「どんな」

「今夜、応援要請が来るかどうか。負けた方は明日の応援要請を可能な限り受けもつ」

「『来ない』」

「オーケー。賭け成立ね」

「……………」

「いや、返事くらいしてくれても…………って」

さつきからやけに口数が少ないと思ったら、いつの間にか目を閉じて寝てる。

おいおい。僕はこれでも東の魔法使いとは敵対している立場の間なんだけどな。それ以前に男だし。もしかすると恥じらい以前に女性としての自覚が欠けているんじゃないか。

「まあいいか」

仮眠は彼女から取ってもらうことにする。

女尊男卑の原則に従って、僕に選択権はなかったわけだ。

結果的に、賭けは僕の勝ち。

お馴染みの通信機から瀬流彦先生の連絡を受けて、現在三人の敵と交戦中のコーミ・イビペアのところに僕が向かうことになった。

「春日さん」

「ふえ？」

「起きたね。詳しいことは通信機で先生に聞いて、じゃあ」

寝ぼけ眼の春日さんを残して応援に向かう。

「先生」

『そのまま川沿いを真っ直ぐ五百』

瀬流彦先生からの返答。

山の中では真っ直ぐに現場へ向かうのが近道だとは限らない。高低差まで考慮した経路選択が鍵になってくるため、地図を持ったオペレーターが存在が早急な到着には不可欠だ。土地勘のない場所だからこそ、よりスムーズで確実な情報伝達が求められる。

『二時の方向に三百』

「了解」

木々が茂る森の中では月明かりは頼りにならない。方位磁針を注視する暇なんてないから、鍛え上げた方向感覚を駆使して進む。西の本山で鍛え上げた三半規管は伊達じゃない。

近づくにつれ、瀬流彦先生のオペレートなしでも進めるようになってくる。

子どもの頃、それこそ物心つく前から身近に魔力を感じていた。

魔力も気も一般人レベルの僕だけど、感知だったら一流くらいにはなれる。

『敵は二組に分かれている。揖斐くんは一人のほうを追っているけど、神海くんは二対一だ。加勢頼むよ』

「了解しました」

通信を切って、しまっ。

その代わりに腰から短刀を引き抜く。いつもの得物はキャンプに

持ってくるにはかさばるし、目立ちすぎる。だから代用。

どちらかといえば、暗器にもなるこつちが僕の本職。

欲を出せばあと五センチは長さが欲しい。

けど、これで充分。

物陰から飛び出し、コーミと対峙している二つの影のうち、近い方に振り下ろす。

金属音。

火花が散る。

手首を返して追撃。阻まれる。相手の得物も同じような短刀。

ぎりぎりとしのぎを削る。

一瞬の均衡。

ならば！

もう一本の短刀を腰から引き抜いたところで、それを弾かれる。

考えるまでもなく、反射的に距離を取った。

相手も二刀。技量で負け。そして得物は片方が行方不明。

一本になった得物を油断なく構える。

もう一人の敵に動きはない。

二人の敵を僕とコーミで挟み込むような形になった。悪くはない。

そこかしこの木や地面に馬鹿でかいネジが突き刺さっているのが、わずかな月明かりでなんとか確認できる。ネジは発光はしていない。無効化されてしまった証拠だ。

あの術は便利だが、相手の魔力や気に作用するという特性上、武器に込められた魔力や気には否応なく反応する性質を持つ。

純粋な肉体強化タイプやただの魔法障壁には比類ない強さを発揮するが、自分の得物になんらかの強化を施す術をもった相手とは根

比べになる場合が多い。コーミのネジが追尾するのは、相手ではなく、活性化している魔力や気なのだ。手動マニュアルの操作性が低い以上、活性化の度合いが高い相手の武器に込められた魔力や気を追尾してしまう傾向にある。

「コーミ、平気か」

「遅いぞ」

案外元気そうであった。

二刀流のほう一人だけだとしても、僕ひとりで相手をするのは遠慮したいレベルだ。

きりきりとした緊張感の帳が落ちる。

と。

「鈴菜スズナ、武器を下ろして」

「あ？　なんでよ」

動かなかった方が二刀流に声をかけ、二刀流が応える。

二つとも女の声で、僕はそれに聞き覚えがあった。

「それ、世利先輩セリ」

「嘘つけ。世利さんはもっとでかくて強かったよ」

「でも……」

小さい人影が萎縮してさらに小さくなった。

「弾場、どうなってる」

「どうなってるもなにも……僕の知り合い？」

コーミが嘆息する気配が伝わってきた。

「なら俺は揖斐の加勢に向かうが」

「いってらー」

「……頼んだぞ」

もう一度嘆息する気配が伝わってきたのは、なぜなのか。

「ちょっと、おい！ 待てお前！」

鈴菜　スズがコーミを引きとめようとするが、もちろん彼が止まるはずもなく。

「スズ、奈砂^{ナスナ}。ひさしぶりだね」

「げ」

「弱くなってて悪かったね」

「げげげ」

木々の隙間から差し込んだ月明かりが僕たち三人を照らし、僕は逃げ出そうとするスズの首根っこを捕まえた。

スズはそのとき般若を見たとき、後にナスナに語った……らしい。

揖斐の父親は魔法の研究者だった。母親は一般人で、その間に生

まれた彼は、言うなれば魔法使いのハーフだった。突出した才能もなく、センスもない。そんな彼が魔法生徒になると決意した時、当然のように両親は反対した。適正がないことは彼本人も承知の上だった。しかしそれでも彼は魔法生徒になった。

幼稚な反抗心

それが当時の自分を動かしたのだと、現在の揖斐は評価する。同時に、なんて幸せな世界を生きていたのだろう、と思う。

あの男と大浴場で話したこと、その意味の半分も理解していなかったし、しようともしてこなかった。

後悔した。

さまざまなこと。

“それ”は目前まで迫っていた。

防御の魔法は間に合わない。

手数が圧倒的に足りなかった。

実力はそれ以上に足りていなかった。

三人目の侵入者は若い男だった。軽薄な若者風の恰好をしたその男からは、力を持つ者が当然備えているべき余裕というものが抜け落ちていた。端的に、必死だった。彼を怯えさせている脅威は、少なくともこの場にはない。

揖斐を追い詰め、まさにその首へと凶刃を振り下ろそうとしている男の表情は、まるで彼自身がその刃の先になすすべなく寝そべっているかのようにだった。

ナイフの先が揖斐の首に触れ、

やわらかな皮膚を押し込み、
一点の圧力に耐えられなくなった皮膚にぷつりと刃が沈み込む。
そして

4tトラックが横切った。
目の前を、高速で。

そのように、男には見えた。
実際にはそんなものはこの森の中を走っていない。

列車が通り過ぎるような音を立てながら、何か、虫のような何かの
大群が横切っていった。

男は悲鳴を上げた。

恐怖のためではない。

痛み。

利き腕の手首から先が　　ない。

ナイフも、その先にいた少年も。

消えていた。

神海レイジは樹海を駆けていた。

無論、瀬流彦教員との通信回線は開いている。彼のオペレーターを受けて揖斐のもとに向かっていた。そして瀬流彦教員によれば、少し前から揖斐との連絡が取れなくなっているらしい。

通信機の座標は移動していない。

交戦中か、その最中に通信機を落としたのか。

なんにしろ、手がかりは通信機の座標のみだった。

神海は瀬流彦教員のオペレーターで通信機の座標へと急行する。

とはいえ、そう心配しているわけでもなかった。

侵入者というのは、弾場江利の知り合いらしいのだ。彼女らの目的が何なのかは不明だが、すぐに解決することだろうと予想していた。

しかし予想は大きく外れ、それがただの楽観視にすぎなかったことに気づいたのは、この数分後のことだった。

010・夜のお仕事です。(前書き)

この話と次の話で、見る人によっては鬱な展開が入るかも。
苦手な人は注意してください。

010・夜のお仕事です。

コーミがイビの失踪を確認してから約二十分後　。

イビの失踪にあたって緊急会議を行なうことになった僕たちは、本部から数十メートル離れたところに設置してある瀬流彦先生のテントに集まっていた。集まったといっても、警備を手薄にするわけにはいかないので、カムイ神父とコーミはそれぞれの持ち場にとどまったまま通信機を通じての会議への参加となる。

本当なら僕や春日さんも持ち場を離れるべきじゃないんだろうけど、僕側にやむをえない理由があって、春日さんはそのとばかりを受けたという形。

そのやむをえない理由というのが、そこにいる二人、スズとナズナだ。

ナズナは正座でじっとしているけど、スズはあぐら崩れの片膝立ての恰好をして、立てたほうの膝に頬をつけて丸まっている。ふてくされている雰囲気バリバリ。……自分がミニスカートだということに気づいてほしい。

くいくい、と袖を引かれる。

春日さんだった。

「何したの？」

声をひそめて訊いてきた彼女の視線の先にはもちろんスズがいるわけ。

「スキンシップ」

「はい？」

再度疑問符を浮かべる春日さんを放置して、膝立ちで前進してスズのところへ。テントは狭いから立ち上がれない。

「いつまでも昔のことを気にすんなって」

そう言って、頭を撫でてやる。

おんなのこはあたまなでられるのによわい、ってマヒル先輩が言ってた。

「昔のことって……。それをあんたが言うか」

ぐりぐりと撫で回されながらスズは呆れていて、その隣でナズナが苦笑していた。

「スズナ、喜んでる」

「そーかそーか」

ナズナがぼそりと言った。

彼女はこういうことに関して、嘘をつかない。だからそれは紛れもなくスズの本心なのだ。

ショートカットのナズナの髪は僕にクシャクシャにされて跳ね放題だった。彼女は大雑把で、きつとそんなことは気にも留めないだろう。だから僕が手櫛で整える。

ちよつとだけ、懐かしいな。

「私もそう思う」

「何が」

ナズナが呟いて、蚊帳の外のスズがその内容を問う。幾度となく僕らの間で繰り返されてきたこと。

僕の心は形を持ちすぎていると、かつてナズナは言った。分かりすぎるほど分かって、怖いくらいだと。

「スズが照れてて可愛いなって話だよ」

ぱっ、とスズが顔を上げて僕を見た。口元があわあわしてる。

「世利先輩は嘘つき」

「……………」

ナズナは嘘をつかない。そしてなぜかスズはふてくされている。なぜだ。

「世利先輩は嘘つき」

もう一度ナズナは言った。

分かっているくせに、と言外に。

自分に嘘をつくのをやめたらどうだ、と、これは以前言われたことだったか。

そうやって僕たち三人がスキンシップをとっているうちに、カムイ神父たちの準備　といっても、持ち場に戻るだけなのだが
が終わった様子。

「じゃあ、これから始めるけど、外の二人は大丈夫だね？」

教師とはいえ、生徒の失踪という異常事態には不慣れなのか、瀬

流彦先生がやや緊張した面持ちで声をかける。

『問題ありません』『おーけー』

コーミはいたって真面目に。カムイ神父は慣れっこなのか、瀬流彦先生とは対照的で気が抜けすぎていると感じるくらいの返答だった。あの人は不真面目というか……基本的に傍観者に徹するきらいがあるからな。見ず知らずの生徒一人が失踪したところで、あまりこたえないのかもしれない。

「本校の魔法生徒である揖斐くんが行方不明ということで、こうやって集まっていたくことになった次第です。通信機が落ちていた場所の付近では揖斐くんを見つけれませんでした。で、間違いないよね」

『はい。俺と、後から合流した弾場で搜索を行いました。付近に揖斐のものらしき魔力反応はありませんでした。ただ、簡単な攻撃魔法を行使した形跡は多く見受けられたので侵入者との交戦があったことは間違いないと思われます』

「弾場くん？」

「間違いないです」

「じゃあ次は三人の侵入者について」

瀬流彦先生が手元のメモ用紙に一度目を落とし、それから僕に目配せする。説明をしろ、ということか。

「三人の侵入者のうち二人は僕の知り合いです。背が高く、制服僕らのものとは違いますが、女物の制服を着ているのがスズナで、小さいほうでジャージ着ているのがナズナです。三人目については僕からは何も。知り合いでないことは確かです」

「えっと、じゃあ……」

瀬流彦先生がスズとナズナを見比べる。

「……スズナさん」

こういう時は大抵みんな、スズに話を振る。

ナズナは話しかけにくい雰囲気がある。なぜなら彼女は他人の目を見ようとしない、というか、そもそも目を開けることがほとんどないから。雑音を感じた人が耳を塞ぐように、彼女は目を閉じる。

「あなた方はなんでこんな所に？」

「は？ んなもん、仕事中に世利さんに無理矢理引っ張ってこられたからに決まってるだろーが。私たちは好きでこんな狭苦しいところにきたんじゃないよ」

突っ込みたい箇所はいつぱいあった。

質問に答えてないとか、君たちの事情を瀬流彦先生が知るわけないとか。

何から言っているのかわからない。そもそも僕が口出しすべきところなのだろうか。

「世利先輩。まずスズナを放してあげて、先輩のせい」

仕方ない。

ナズナが妬いているようなのでスズを撫で撫で地獄から解放してあげた。妬いてない、とナズナが小さく呟いた。素直じゃないヤツめ。

瀬流彦先生がものすごく微妙な顔をしている。

そりゃそうか。教え子が行方不明なんだもんな。それなのにこん

なコントをやられてちゃ、ねえ。

「……スズナさん。その、仕事の内容というのは？」

「仕事は仕事だよ」

「だから仕事は何かと」

「さあ。仕事っていったらあの仕事しかないだろ」

どう見てもスズは中学生くらい、鼻眞目に見ても小さめの高校生にしか見えない。でも、瀬流彦先生はこちら側の世界に身体半分浸かってるんだから予想つかないわけでもないだろうに。

「ふざけないでください。こちらは生徒一人が行方不明になってい
るんです」

口調が荒くならないように怒気を抑え、しかし顔は温和な彼の普
段に似合わず険しかった。

でもスズはそんなことではひるまないし、それ以上に彼女は好戦
的な性格だ。

「それが？ よくあることだろ」

「きみは……！」

メモを取るために持っていたペンをぎり、と握りこむ瀬流彦先生。

「もう死んでるだろ、そいつ。諦めなよ。そんなことより三人目の
侵入者さんを早く捕まえて、被害の拡大を防ぐほうが先決なんじゃ
ねーの？」

おそらくそれは正論だった。スズが、「仕事とは何か」の質問の
答えをはぐらかしてこの議論を長引かせている張本人でなければ、

もつと説得力があつたのだろうか。
スズは遊んでいた。仕事が長引いて彼女もイライラしているのだ
ろう。

「どうしてそんなに軽く命を……。きみには、命の価値が分からない
いんですか!!」

「 殺すぞ、てめえ」

一瞬の出来事だった。

泣きそうに顔をゆがめたスズは、そのすぐ後には能面のような顔
をして短刀を瀬流彦先生に突きつけていた。じじじと魔法障壁と
刃がせめぎあう音がしている。

「ちっ」

埒が明かないことを悟ると、スズは短刀をしまった。

「外で待ってる」

そう言ってスズはテントを出た。

沈黙が下りる。

『何があつたんですか』

「ちよつとね。僕も熱くなり過ぎたみたいだ。心配ないよ神海くん」

また沈黙。やっぱりここは先輩である僕が言っておくべきなんだろうな。

「すみません先生。スズナは少し怒りっぽいところがあって……でも、先生も無神経でした」

「……僕も反省してる。ごめんね、ナズナさんも。君たちのことを悪く言ってしまった」

「私は気にしてない」

ナズナの言葉にも若干のトゲがある。

「うん。でも、あなたはいい先生」

突然の言葉に戸惑う瀬流彦先生。

彼女の気が変わるのはいつだって唐突だ。

ナズナは、相手の本心を垣間見る。だから彼女が見る世界には「伝わらない気持ち」なんてものは存在せず、それゆえに彼女は「心が伝わらない」という事象が理解できない。大昔の人間が重力の存在に無自覚だったように、彼女は「以心伝心」という言葉の意味を実感できない。

他人の心の機微には敏感なくせに、自分を表現するのが苦手な女の子。それがナズナだった。

「私たちの仕事は、あの男を捕まえること。協力してくれるなら、歓迎する」

そうして彼女はスズの小さな努力を無駄にした。

漏洩厳禁の仕事内容をあっさりとばらす。

僕たちはもはや部外者ではないという判断なのか。

どんな理由にせよ、それが解決への近道だと、僕も思う。

「な、本当に大丈夫なの？」

今晚の警備のスタート地点。すでに消えた焚き火にもう一度火を灯して、僕と春日さんはそれを囲んでいた。

コーミは今頃、侵入者捜索に励んでいるだろうが、僕と春日さんはこうやって周辺警備。ナズナが本気で捜索に当たるようだし、もしもの時にはカムイ神父もいる。遅くとも夜明け前には、今回の騒動に決着がつくだろう。

そんな中、不安そうしている春日さん。

「心配いらないでしょ。ほとんどの生徒は瀬流彦先生が張った中規模結界の中で、唯一山の中腹過ぎまで出張っているA組のメンバーの近くにはカムイ神父が待機。刹那にも不審者がいたらすぐに連絡取るように言っておいたし」

「や、そゆことじゃなく。あの二人組み、スズナさんとナズナさんだっけ」

「……彼女たちも『協会』の所属だけど、今回の仕事は別件らしいから、いきなり君たちに襲いかかるってことはないと思うよ」

「それは別に心配してないんだけど。エリイもいるし……。なんかエリイが心配してなさ過ぎて馬鹿らしくなってきた」

伸びをして、ぐてーと仰向けになる春日さん。

「砂利刺さった」

「学習しなよ……」

女の子というのはよく分からない。

たぶん春日さんはスズたちの実力を心配しているんだろうけど、それ以前に僕たちが西の人間だということに危機感を持たないのだろうか。

僕も、スズもナズナも、三人目の侵入者もみんなグルで、嘘をついているという可能性を考えないのだろうか。確かに、得る物のなさから言って、その計画は根本から無意味なだけけれども。この期に乗じて木乃香をさらうことくらいか、価値があるのは。しないけど。

「揖斐は大丈夫なのかな」

「死体が見つかっていない以上、死んでるってことはないと思うよ。侵入者^{ターゲット}に死体を隠す技術はないらしいから」

気休めだと思ったが、春日さんに無駄に不安な思いをさせないために。

「……瀬流彦さんじゃないけどさ、エリイも、なんか軽いよね」

「……」
「ごめん。私こそ軽かった」

焚き火に照らされた彼女の横顔が寂しそうに、僕には見えた。でもそれは僕の勝手な勘違いだ。当たり前のことかもしれないけれど、僕には彼女の本心が読めない。

「春日美空はさ、両親の方針で魔法生徒やってるんだ。本人はそんなこと望んじやいないってのにな」

唐突に、春日さんの独白。

「私も揖斐は当番が同じ日だから、たまに話す機会があったんだ。まあ、最初は私のイタズラだったんだけどさ。学年も同じだったし、何よりアイツは……なんとというか、落ちこぼれ？ だったからさ。私と似てたんだ。だからピリピリしてる雰囲気能耐え切れなくて、やっちゃた」

春日さんらしいと思った。つい苦笑する。

「でもアイツは怒ったりしなくて。それからたまに話をするようになった。ほとんどが愚痴だったけどさ。で、アイツの身の上話も聞いたりしてさ。それが私と真逆で。才能ないって分かってるのにあの馬鹿は魔法使いになろうとしてて。なんか困った」

努力してるのに、遊びほうけてる私と変わらないくせして、と自嘲するように呟く。

「私は魔法が嫌い。夢がないし。お前らみたいのがいるし。揖斐は馬鹿だし」

「イビのこと好き？」

「嫌いだよ。大嫌い。アイツは魔法が好きだったから」

「……フィクションで、魔法がない世界ってあるじゃん。ノンフィ

クシヨンだっけ？ どっちでもいいか。それで、その世界には不治の病に侵された女の子がいて、その家族は魔法があれば病を治せるのについて思うわけ。笑っちゃうよな。ずっと魔法は身近なものだったけど、それに救われる人間ってのは見たことがないよ」

春日さんは力なく笑った。

僕には言うべき言葉が見つけれなかった。

011・勝手な想像です。

人間は、それが自分であれ他人であれ、同じ人間という生き物に価値を見出したがる。その価値を生み出すのは主に因果関係であり、つまるところ順番というのが非常に大事なのだ。

たとえば臓器移植を例にしてみる。

パターンその一。

Aさんは先天的に心臓が悪かった。手術では治せず、臓器移植が必要だった。Bさんが事故に遭った。飲酒運転のドライバーの前方不注意。Bさん側に非はまったくなかった。しかしBさんは脳死になった。Bさんは生前、ドナー登録をして、もし自分が脳死になった場合は臓器を提供する旨を示していた。幸運にもAさんにBさんの心臓を移植しても問題がないことが分かった。手術をし、AさんはBさんの心臓を移植され、助かった。

パターンその二。

CさんとDさんは一卵性の双子だった。ある時からCさんの腎臓は上手く機能しなくなってしまう、臓器移植が必要だった。Dさんの腎臓の片方をCさんに移植すれば、Cさんは健康体に戻る。Dさんは悩んだ末に臓器移植を決断した。手術は成功。Cさんは健康体に戻った。しかし不幸なことに手術の際に用いられた輸血用の血液にウイルスが混入していたものがあつたらしく、Dさんがそれに感染。もちろんDさんに非はなかったが、Dさんは死んだ。

BさんとDさんは理不尽に死んで、AさんとCさんは幸運に助かった。

結果はまったく同じ。

だがDさんの死に、Bさんのそれ以上の理不尽さを感じる人はきつと多いだろう。

誰かが死んだことで誰かが助かることを許容できても、誰かが助かることで誰かが死んでしまうのは許容できないものなのだ。

これが順番が大事だということ。

良いことの前に起こった悪いことには、人は納得できる。

けれどその逆は、そうじゃない。

スズとナズナの「仕事」というのは、ターゲットを捕まえて制裁すること。

ターゲットの男は飛驒のある結社に所属しており、飛驒に調査に来ていた『協会』の者三人を惨殺したらしい。あまりにもむごい手口に、その「手口」の詳細は二人とも知らないらしいが、遺族が激怒し、『協会』の長に直訴。

……この“長”というのが実は木乃香の父親で、学園長の婿養子であったりするのだが、今は余談だろう。

多忙な長もさすがに見逃せない案件だったようで、犯人の男が所属する結社に抗議。身柄を引き渡してもらおう算段をつけたのだが、そのことを予期してか、犯人の男が逃亡し、行方をくらませた。(逃亡したことが彼の犯行の決定的証拠とされてしまったことは少々皮肉だが)

殺された『協会』の三人は調査班だったとはいえ、易々と殺され

る程度の実力だったわけではない。犯人はかなりのつわものであると予想された。

そこで長は『協会』の下部組織のひとつに仕事を依頼し、その組織の一員であるスズとナズナが動員された、という経緯だ。

こういう案件が回ってくるのはいつものことだし、僕はスズやナズナのことを心配してはいない。

麻帆良の一般的な魔法使いである瀬流彦先生に言わせると、ターゲットは三人もの人を殺した凶悪犯であるらしい。それをナズナの目の前で言うのだから、彼は分かっている。

瀬流彦先生の、こんな子どもがそんなことをするはずがない、という無条件かつ無意味な信頼と、自分の気持ちの間で板ばさみになって葛藤し、何も言えず怒ることもできず表情を決めることもできないナズナの内面を予測するのは容易だった。けれど共感はしてやれない自分が悲しくもあった。僕の力はナズナと似ているけど、決定的に逆だから。

瀬流彦先生はそう言うけど、カムイ神父と、紛争地帯に何度も行った経験のあるコーミの二人は内心では、僕たちと同意見だと思っ
勝手な想像。

でも、こんな風に思わせてしまう僕の常識こそが、春日さんをして「お前らみたいなの」と言わせしめたんだろ。どちらが正しいかなんて僕には分からない。

閑話休題。

だいぶ話がそれたけど、つまり、三人つてのはたいした数字じゃない。

春日さんは不安がっていたけど、僕の予想は外れず、決着は夜明け前に着いた。あまりにもあっけなく。

ターゲットは岩陰に息を潜めていたらしい。案の定、発見者はナズナ。彼女は人の心を「見る」ことができる。そして当然のことながら、人の心がある場所には人がいる。いくら魔力や気を隠蔽しようとな彼女の探知からは逃れられない。発見すべき心が恐怖や絶望といった強い感情を持つていれば、それだけ彼女は敏感に反応する。ターゲットの男の右手首から先は何者かによって切断され、戦意も喪失していた。

ところで、今日の早朝、新田先生のところに学園長から緊急の連絡が入ったらしい。

それによると、僕は家の都合で急遽、京都の実家に戻らなければならなくなったそうだ。不運というのは重なるもので、僕のほかにもうひとり、揖斐くんが、彼の祖父が長年患っていた持病をこじらせて危篤とのことで麻帆良に一足先に帰らなければならなくなった。

一刻を争う自体だったので、揖斐くんは先生方やインストラクターの方々には挨拶をする間もなく、瀬流彦先生に付き添われて麻帆良に向かったそうだが、僕は急を要するわけでもなかったため、本部署に残っていた人たちに挨拶をしてから、新田先生に付き添われて最寄りの駅まで来て、別れた。

新田先生は電車賃として二万円を僕に貸してくれた。しかも「返さなくてもいい」と言う。素直に受け取りながらも、悪いことをしたなと思った。キャンプが終わったらすぐに返しに行こう。受け取ってもらえなければ、……募金でも何でもして下さいと無理にでも押しつけようか。

僕は上り電車に乗ってすぐ次の駅で下車した。

下り方面の電車が来るまでかなり時間があつたので、カレーメイトを食べた。これも新田先生が「持っていけ」と、くれたものだ。

他にもお茶のペットボトルもくれた。

喉を潤しながら、考える。

どうやらこのカロリメ トは賞味期限がきれているようだ、と。

今、僕がいるのは飛驒の山のふもとにある貸しコンテナのうちのひとつ。

二十畳くらいのスペースがあるそこは、南京錠によって嚴重に外界と隔絶されていた。天井に吊り下げられたライトが、ちかちかと明滅を繰り返しながら、うすぼんやりと頼りなく照らしている。

中にいるのは僕とスズ、そして瀬流彦先生だ。ナズナは外でお留守番。これから行なわれる行為のことを考えれば、ナズナが近くにいるのは得策じゃない。彼女は心に敏感すぎる。近くの喫茶店で雑誌でも読んでいてほしいくらいだが、もしものことがあったら、と頑なに貸しコンテナのそばを離れたがらなかった。ナズナと組んで長いスズは「いつものこと」と平行線な議論を初めから諦めていた。

さて……。

ターゲットは茶髪でチャラい格好をした都会によくいそうな男だった。

「ひっ」

「……瀬流彦先生。睨むのは自由ですけど、手は出さないくださいね」

僕に指摘されて、はじめて気づいたのだろう。瀬流彦先生は冷水を浴びせられたかのように僕を見て、それからうつむいた。

彼は今でも、イビの失踪をこの男のせいだと思っているらしい。

そう思いたい彼の心境は分からないでもない。人間は楽観視

この場合そう表現するのが適切かどうかの議論は別として、をしたがるものだ。縁起でもないことだが、ターゲットの男を無力化したのがイビの功績だとするならば、彼も報われるだろう。

でもおそらくそれは事実ではない。

昨晚、春日さんには気休めを言ったけど、状況から見て他の侵入者がいたという可能性が濃厚だ。イビがもし、ターゲットの男を捕まえることができたとしても、手を切り取るなんて非道は彼の倫理的にも実力的にも無理があるのだ。彼が知っている初級の攻撃魔法ではそこまでの威力は出せない。

だからこそ、カムイ神父とコーミはキャンプ場に残り、わざわざ「クマを見た」とカムイ神父に嘘をついてもらってまで生徒を本部近くの一箇所に集めたのだ。昼すぎには麻帆良からの応援も到着する。

余談だが、カムイ神父の「クマを見た」発言に半信半疑だったインストラクターさんたちの「説得」には春日さんが駆り出されたらしい。幻惑系は彼女の得意分野だし、活躍の場があつて、彼女のためにもなっただろう。という勝手な想像。カムイ神父もコーミも一般的な魔法使いが使うような魔法はからつきしだから……。

「それと、先生。これからすること撮影するんで、声くらいはいいですけど、顔が映っちゃうと、いろんなところから目え付けられるんで気をつけてくださいね」

カメラを指して言う。

瀬流彦先生は僕を見ようとしなない。

「一応、仕事なんで……」

言い訳をするように、ぼろりと言葉がこぼれた。

気まずさを感じながら、スズにも注意をうながす。

「スズ、分かっているとと思うけど、顔はダメだよ。誰だか分からなくなるから。殺さない程度でお願い」

「分かってるよ。私もボスには怒られたくないし」

スズとナズナには、ここに向かう途中でボスから連絡を受け、僕も正式に仕事を請けたことを話してある。

ひとつはスズの後に。ホラー映像を取る趣味はないんだけど、仕事だから仕方ない。

そしてもうひとつは麻帆良に帰ってから。敵地での大仕事だけど、マジックみたいなもので、基本的に無害だから麻帆良への攻撃とはみなされようがない。だから僕に危険は及ばない。

僕はカメラの前に立ち、スズは制服の下に着込んだパーカーのフードをかぶった。

持っていた銀のアタッシュケースをターゲットの男のすぐそばで広げながら、スズは言う。

「やるだけやるけど、あんまり期待しないでね。せんせい」

「……………」

瀬流彦先生も、自分の期待が間違ったものだって分かっているわけじゃないと思う。彼にとって、犯罪者の苦痛は、ほとんど存在しない希望よりも軽かったというだけのことだ。

どっちに転んでも倫理も正義もあったもんじゃない。

あとは個々の価値観の違いってだけ。

「準備できたよ」

「じゃあ、撮り始めるから」

僕は無造作に録画開始のボタンを押す。

カメラ画面の向こう側には、綺麗な脚をしたミニスカートの女の子がいた。

収穫なし。

ターゲットの男はイビの行方は知らないの一点張り。確かにイビと思われる少年と殺り合ったが、突然どこかに消えたと言っばかり。どこに消えたのかも、誰の仕業なのかも分からないらしい。

ずっとコンテナにこもったままでは息がきれるので、ナズナに南京錠をはずしてもらって、いったん外に出た。
と。

錠を開けてくれたナズナは、僕たちに見られるのを嫌がるように、コンテナの裏手に逃げていく。僕とスズはそれを見送った。

「彼女、どうしたんだい？」

瀬流彦先生が表情に憔悴を滲ませながらも訊いてくる。自分もナズナ並みに疲れているだろうに。

「ナズナは、いつもああなるんです」

一度だけ、僕は見たことがある。

あの時はスズとナズナに加えてもうひとり、僕と同期のゴスロリ好きの戦闘狂がいたから、僕はナズナと待機していた。

彼女は恥も外聞もなく、泣き、鼻水を垂らし、歯をがたがたと鳴らす。僕は彼女に取りとめもないことを話し続けた。それが彼女の願いだつたから。そぐそばから流れ込んでくるリアルすぎる苦痛を、聴覚と触覚とそして視覚で紛らわせる。邪魔だからといつも切り捨てている視覚で、目を見開いてぎよるぎよるとひっきりなしに眼球を動かし続けて、新鮮な世界からの刺激の奔流で、苦痛を塗りつぶそうとする。

小さな子どもが夜の恐怖から身を隠すために布団にこもるように、彼女は内側から湧いてくる他人の苦痛から逃げるために、意識を外側に向ける。

「……よかつたら、ナズナを頼めませんか」

「弾場くんは？」

「僕はまだ仕事が残ってるので」

ちらりとコンテナに視線を向けたが、瀬流彦先生はもう何も言わなかった。

「弾場くんもスズナさんも……あまり無理しちゃダメだよ」

「ナズナ連れて喫茶店にでも行ってください。できるだけ人が

多いところをお願いします」

コンテナの裏に向かおうとしていた瀬流彦先生の背に声をかけると、彼はゆらゆらと手を挙げることで応えた。

「大丈夫かな。あの先生」

「当分は再起不能でしょ。昔を思い出すよ」

「……私も」

平和な麻帆良で生きてきて、「立派な魔法使い」マキステル・マキ思想に凝り固まった大人にとつて、あの光景をただ見ているというのは、地獄のよ
うな時間だっただろう。

まして彼は教師であり、地獄を作り出しているのはどこにでもい
そうなちよつと生意気な女学生なのだ。

価値観の崩壊は、誰にとつてもつらい……いや、「つらい」なん
てチープな言葉で表しちゃいけないくらいのことだ。

こういう世界があるという知識はあつただろう。やってはならな
いことだと否定してきたのだろう、今までは。だが彼は、彼自身の
願いによつて、彼の思想・価値観に反するあの地獄を作り出した。
そこで苦しむ人間を見た。それで、何も得られなかった。こじつけ
でもあの行為を正当化する言い訳の材料が、ゼロだった。

もう彼は、自分のことを「立派」とも「正義」とも形容できなく
なつた。そういう言葉を言うたびに、聞くたびに、きつとあの地獄
が脳裏に蘇る。僕には分かる。だってそれは僕も、おそらくはスズ
もナズナも、通ってきた道だから。あとはそこでとどまるか。僕た
ちがいるところまで墮ちてくるかの違いだけ。

でもきつと彼は来ない。

魔法使いとして積み上げてきたものの全部ぶち壊されて、残つた彼

は、教師だった。

こうして僕のキャンプは一足先に幕切れとなった。

まあでも。

サバサバたちは今頃ちゃんと満喫できているだろうからそれでよしとしよう、と、「クマ」のことを棚上げにして思う。

たとえ「ジャングルを探検」できなくても、一緒にいる誰かがいれば、それだけで楽しいものだ。

という、僕の、勝手極まりない想像。

そういえば、ひとつ、思い出したことがある。

その時は夜だった。

仲良し四人組は縁側に座って、庭には着物が似合う大きな背中があつて、僕たちは彼の話を聞いていた。

僕の父代わりの人。

ひとりではないということ、それだけで生きる理由になるもの

です。だからお星様もあのようになり、それぞれがバラバラになって寂しくないように、光っているでしょう。ほら、あそこにオリオン座があります。仲良く三つのお星様が並んでいるでしょう。あなたたちは四人ですが、いつまでもあのようになり

011・勝手な想像です。(後書き)

なんか不完全燃焼のような気がしないでもない。

やっと伏線をひとつ回収。そしてまた伏線……。

ばら撒いてる伏線を回収しきれるか今から不安ですが、頑張ります。

でも、伏線って大事だと思う。どんなご都合主義でも伏線の名の下には「計算されたつくした物語の結果」に姿を変えらるというのが作者の持論です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165y/>

Blue;HEAd

2012年1月6日16時00分発行